

鴿沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 3 号

第1特集 ふじたかし 富士 山氏の人物像

- | | | |
|-----------------------|-----------|----|
| 1. 父（富士 山）の思い出 | 山之内良子 ... | 1 |
| 2. 鴿沼を語る会と富士 山氏 | 有田 裕一 ... | 3 |
| 3. 医師としての富士 山氏 | 佐藤 和子 ... | 5 |
| 4. 富士 山医師と湘南学園 | 内藤 喜嗣 ... | 8 |
| 5. 富士 山氏略年譜 | 編 集 部 ... | 14 |

第2特集 鴿沼の生き物

- | | | |
|---|-----------------|----|
| 1. 幻の鴿沼蘭は生きていた | 番場 定孝 ... | 15 |
| 2. 近年、鴿沼に住みついた蝶 | 竹内 広弥 ... | 18 |
| 映画俳優 佐分利信…芸名の由来 | 岡田 哲明 ... | 21 |
| 菊本別荘のこと（鴿沼第87号追記） | 新田 貴代 ... | 29 |
| 芥川の短編『悠々荘』は何处？ | 有田 裕一・佐藤 和子 ... | 34 |
| 劉生研究 <small>しょう</small> 「正ちゃん」の正体判明 | 岡田 哲明 ... | 39 |
| 鴿の字体について | 杉本 辰夫 ... | 42 |
| 鴿沼の歴史的家屋をたずねて⑫ 後藤医院(分院) | 岡田哲明(編) ... | 44 |
| 史跡見学 鴿沼の西縁を歩く | 渡部 瞭 ... | 56 |
| 「鴿沼を語る会」活動の記録 | 総 務 部 ... | 60 |
| 編集後記 | | 63 |

『新編相模風土記稿』（天保13年、1892）に、「鴿沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鴿 沼 を 語 る 会 発行

[特集 1]

ふじ たかし 富士 山氏の人物像

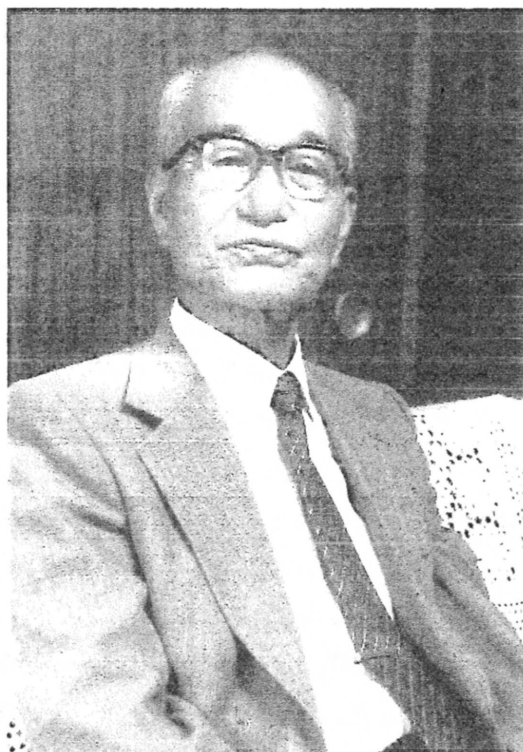
昨年度、われわれ《鵠沼を語る会》は、創立30周年を記念し、さまざまな催しを試みました。

わずか30年ですが、創立当時のメンバーはすでに一人も在世していません。

会誌『鵠沼』のバックナンバーをひもとくと、何人かの常連執筆者というべき方がおられたことに気がきます。ごく初期の伊藤 昌氏、伊藤 節堂氏、中期の塩澤 務氏、葛巻左 登子氏、田中まさ子氏、吉田興一氏、高木和男氏、そして富士 山氏という面々です。

中でも富士 山氏は、そのお名前のユニークさといい、若い頃は芥川龍之介や川端康成の脈を取ったという経歴といい、文学や生物など多方面にわたる関心の深さといい、どういう方なのだろうという興味がわきます。

富士 山氏にゆかりの方々にその人となりを紹介していただきました。



故・富士 山氏

父(富士 山)の思い出

山之内良子(鵠沼松が岡在住)

来年1月24日、父の17回忌を迎えます。父は平成3年に96歳の天寿を全うしました。しかし最後の数年は本人の希望する姿で終れなかったのではないかと思います。といいますのは、母が2度目の大腿部骨折でリハビリを兼ねての入院の折

“わしも一緒に行く”とそのリハビリ施設のある病院に共に入院してしまいました。父は一時たりとも母のそばから離れたくなかったに違いありません。

父は入院前、よく母のベッドの横に座り母の手をとって励ましていたのが思い出されます。父にとって母は最愛の妻でしたから…。もちろん父の浮いた話など聞いたこともありません。

ちょうどその時期、私はリュウマチを患い父母と自分の家族4人の世話はとても大変でした。当時はまだ現在のような介護制度はありませんから、父はそんな私を気遣って自ら入院したのだと思うのです。

私がまだ小学校低学年の頃、高熱を発して寝ていますと冷たいタオルを順に当ててくれたり、あるときは熱で熱くなった布団のなかに入ってきて冷たい足で私の身体を冷やしてくれた感触をいまだにはっきりと覚えています。

父の趣味は読書でしたから家の中は本、本…、子どもたち（女ばかり4人姉妹）は自分に読める本を探し出しては読んでいました。本の種類は多方面に亙り、古典から夏目漱石、森鷗外など、海外の小説、専門の医学の洋書と和書、等々たくさんありました。これらの本は戦後の食糧難の折、何人かの古本屋がきて買っていました。それが我々家族の命の糧になったのです。晩年の父の愛読書は、井上靖や司馬遼太郎など歴史ものが中心でした。私も年とともに段々と歴史ものを読むようになったのも父の影響でしょうか。

祖母は5人の子に恵まれました。父は4人の姉妹の間に生まれた、ただ一人の男の子でしたから祖母は“山、山”と呼んで可愛がり、大事に育てたそうです。若い時は身体も弱く、祖母も大変心配したようです。後年、この鵠沼を療養を兼ねて医師開業の地として選び、大学の研究室に残る道を断念した父の考えは正しかったのだと今にして思い至ります。

父は家長として大正末期から激動の昭和時代を私ども家族のためによく尽くしてくれました。その父を支えてきた母もまた偉かったと思います。

母は父の調剤の仕事を手伝いながら、常時7人の家族の面倒を見、そのうえ、春夏冬の学期休みには伯叔母や従兄弟たちが大勢泊まりにくるのが恒例でしたから、その時の母は大忙しでした。特に物資の乏しかった時代はおもてなしのやり繰りに大変苦勞をしていました。

いま、父母の残してくれた思い出の一杯詰まった鵠沼の地で生活できる満足感にひたりながら日々感謝しております。

（やまのうち りょうこ 富士 山氏四女）

鵠沼を語る会と富士 山氏

有田裕一(会員)

富士さんは「鵠沼を語る会」の中でも最も古い会員の一人である。ただ設立当初の会員ではなく、おそらく昭和53～54年頃から入会された方であると推測している。これは湘洋中学のPTAに成人教育委員会があり、この企画で昭和56年に



葛巻左登子さん（芥川龍之介の姪）との対談があり、この時公民館和室で撮った写真が山之内家に残っている。この時既に富士さんは語る会の会員で、葛巻さんはこの少し前富士さんに勧められて会に

富士山氏と葛巻左登子氏(昭和56年 鵠沼公民館和室)

入会されたとも聞い

ている。

富士さんは会誌『鵠沼』への寄稿も多く、11号(昭和56年)から始まって33号(昭和61年)まで、ことに昭和58年から61年まではほとんど毎号に原稿を寄せられている(略年譜参照)。

この中で『芥川の晩年の消息』の記事は、直接龍之介を診察した富士先生の所見を記憶にもとづいて記したもので、医学的にも興味のあるものであるが、この点は次の項でふれることとする。

その頃の会の話題を盛り上げたものの一つに「ハランかスルガランか」の問題があった。会誌19号で斎藤茂吉・土屋文明の両氏が鵠沼で療養していた龍之介の見舞いにハランを持参した内容の記事があり、以前茂吉や文明に師事していた一会員が当時まだ健在だった文明氏に手紙で聞いたところ、「私たちが持参したのはハランではありません。いくら田舎者の我々でもハランを見舞いには考えつきません………」とあり、龍之介全集の中の誤りが初めてわかった。それま

で多くの会員が龍之介が住んだ二階家の庭先のハランを「これが例の見舞いのハランか」と何度も見に行ったことが笑い話になってしまった。

富士さんも、22号ではこれを修正し「医学書では初版より最新版が重んじられるが、文学書ではその中に誤りと思われる所があっても著者または編集者が正誤表を出し、その誤りを認めない以上は初版の誤りはそのまま通るならわしになっている……」と長年信じてきたハランの一件を残念な気持ちで記事にしておられる。

このように氏は常に会をリードしてこられたのであり、特に昭和59年頃からか、当時会長の伊藤節堂氏が二度にわたり入院され、富士さんがこの間、会長代理として会を精力的に支援し、毎月の例会には医学とは全く無縁の話をされた。私は昭和56年頃入会したのであるが、この時の富士さんの講義がとても印象深い。この辺のところをちょっと紹介してみる。

先生は万葉集に造詣が深く、毎日万葉集を開いていたそうで、鶴についてのお話の時にも、万葉集には4516首の歌が収められ、そのうち46首に鶴が、鵠は1首あり、鶴の中には鶴、^{おおとり}鶴、鵠がある。また、万葉集は読む時には声を出す。そして二度読むなどと教えられた。また、昭和60年7月の例会ではトルストイの『アンナカレーニナ』の話で、『カチューシャ可愛いや』や『さすらいの唄』を歌ってくださり、次の時には『今様』なる平安時代の声楽にふれ、『^{いまよう}想婦恋』から『^{そうふれん}東雲節』^{しののめ}までに至った。また、『早春賦』も皆で歌ったものである。またある時は『君が代』の歌詞の中で、さざれ石（小石）が巖（大岩）となるの部分に納得がいかなかった様子で、その原典を古今集の中から探してこられた。

（講義の一部が私のテープの中に残っていて、今聞き返してみると、お顔に似合わず割に高い声が響き渡っている）

このようなユニークな講義の内容であったと共に、私の記憶に深く残っているのは、次期会長についての相談があるので、私の家へ行くとの連絡を受け、それでは申し訳なく思い、氏のお宅へ伺い、そこで病院からの伊藤節堂さんからの葉書を見せていただいた。ここで私の意見を申し上げ、葉書の内容とは異なる方が選任されたのも、今はなつかしい思い出である。

その後、富士さんは33号の寄稿を最後に奥様の骨折の看護のため、病院に同伴入院され、元気なお声も聞かれなくなった。

入院後に入手した原稿は、退院後の発表を予定していたが叶わず、58号の中に遺稿として掲載された。

（ありた ひろかず）

医師としての富士 山氏

佐藤和子(会員)

「鵠沼を語る会」にいらした頃の富士山さんというと、医師としての現役を退かれ、以後ライフワークとされていた万葉集などの研究に打ち込んでいらした姿が目に見え、けれども『鵠沼』に書かれた幾つかの文の中には“医師＝富士山”の想いがそこそこに見受けられた。ここでは残された記録を基に、あの柔和なお顔と張りのあるお声を思い出してみたい。

東京帝国大学医学部卒業(大正9年)医局在局中、健康のため鵠沼に移り、研究の傍ら開業(大正11年)。以後医学関係の仕事に携わりながら地元藤沢でも東京螺子診療所長(昭和16年)、湘南学園・藤沢高等女学校(後に県立藤沢高校)の校医などを務められ、鵠沼に多くの足跡を残して96歳で旅立たれた。

「学園の校医であった戦後間もない頃、全校生徒にツベルクリン判定を行い、陰性の者にはBCGを接種した。これは神奈川県は勿論、全日本でも初めての行動であった。……注射部位が赤く化膿するので、父兄から文句が出たが、化膿も困るでしょうが、それにより結核に罹らないのだから良いでしょう。と慰めた……。」とある。『鵠沼』58号—鵠沼の湘南学園—

当時富士サンさんと呼びしていた生徒だった私は、この文で日本で初めてのBCGを受けたことを知り、“赤くなった”とか“大きく腫れた”と見せ合っていた幼い頃の友の顔など思い出した。予防医学に力を入れ、啓蒙活動をしておられた富士医師は、大正から戦前にかけての鵠沼が、保養地であるとともに、また一面療養地でもあっただけに、結核の予防には思いを深くしておられたのだろう。

富士さんは、大正15年4月下旬より同年暮れまで鵠沼に住んでいた龍之介の診察に当たっていた。また、龍之介の姪、葛巻左登子さんとも「語る会」の会員として親しくされていたため、芥川について書かれたものが多い。

先ず龍之介との出会いなど、芥川全集(書簡篇)や富士医師の診察記録によると大正15年

6・20 鵠沼 富士という医師にかかった。(小穴隆一宛書簡)^{おあな}

(富士曰く、これは龍之介の誤解)富士医師の診察記録にはない。

7・27 富士は東屋で龍之介を初診

7・29 再び富士さんの厄介になる。(佐佐木茂索宛書簡)

8・7 龍之介、富士医院へ受診に来る。

7～15 龍之介の簡単な手紙を持参して、東屋の女中2～3回薬をとりに来る。

8・16 龍之介、富士医院へ通院(富士はプロモコル投与)本人の希望により16回のオプタルソン注射始める。

9中旬 多加志(次男)へ往診(他の子どもたちへも数回往診している)

「東屋への往診の際、初対面の氏は道すがら想像して来たとは別個の仁であった。文士といふ面影はどこにも無い瘦せた物静かな人であった。梳らない頭髮は蓬々と伸びてゐる。どこか物静かな禅僧とでも云ひたい感じがした。」

「秋になり氏が頭を垂れて瞑想しながら松林を散歩してゐるのにしばしば会った。御気分はいかがと尋ねると、氏は黙って頷いた。相変らずといふ意味だらうと察した。そして再び暑い日が訪れた昭和2年7月24日突然氏の訃報を聞いた。」

龍之介は元来胃腸悪く、胃アトニーといわれており、下痢、疝病にも苦しむ。更に痔も悪いと訴え、神経衰弱、不眠症も重なったいた。加えて乾性肋膜炎、慢性結膜炎、脳疲労などの病名がついているが、体質性反応異常に過ぎないと富士さんは考えておられた。龍之介もいろいろな部分的症候名には不満をもっていたようだ。以前から不眠症を訴え、睡眠剤は何でも試していたというので、睡眠剤を毎晩飲むことの害を説き、胃腸とのかねあいを考え何種かの薬を処方。また、やせた龍之介の様子から結核ではないかと疑う人もあるようだが、臨床上はその微なしと富士医師は書いている。病状、カルテに関しては「芥川龍之介氏の憶い出」富士山一『文藝春秋』昭和10年10月号、および「芥川龍之介氏の憶い出」一『鵠沼』11号を参照。

このように龍之介の訴えを聞き、対処した半年間だったが、自殺後、かつての心身共に弱っていた頃を思い浮かべ、その診察を通して富士さんなりに何か感ずるものがあつたのかも知れない。“私見”としてまとめられたものを記しておく。

これらのことは医者として関心を持った薬などを土台として書かれたもの。『芥川龍之介全集(書簡篇)』をていねいに読み込まれ、その中で投薬されていた薬(これらは斎藤茂吉宛の書簡の中に書かれている)として阿片エキス、オビウム(アヘン)、鴉片エキス、鴉片丸の名が度々出てきていることと、「お送り下さるまじく候や」「ありがたく頂戴仕り候」「毎日服用致し居り候」「お薬のお金だけはとって頂けますまいか」「お薬をお送り下さりありがたく存じ候」などとあることが気にかかっておられたようだ。

佐佐木茂索宛書簡には「……鴉片エキス、ホミカ(睡眠剤の一種か)、ヴェロナ

ール(催眠・鎮痛剤)、下剤、薬を食って生きているようだ……」とある。ちなみに自決の際は、致死量のヴェロナールとジャールが使用された。

富士の私見

「龍之介の死については多くの人は、龍之介の健康のわるいところへ精神障害が亢じたためと考え勝ちだが、富士の考えでは、龍之介自殺前年夏頃から、斎藤茂吉が龍之介から乞われるままに阿片剤を度々送付した(其の後も通院の度与えたものらしい)ために、龍之介は精神障害の他に、麻薬習慣性が加わり、為にますます健康を悪くし、遂に死を選んだものと思う。」昭和58年5月記「……龍之介全集や斎藤茂吉全集中の書簡集を精読し、龍之介晩年の消息を列記することにした。ただし、私の話は龍之介の健康問題に関する方面に限ったもので、文芸的活動のことは、専門違いであることからふれないことにする。」とあり、大正15年1月1日から昭和2年3月27日までの書簡から、関連するものを挙げている。『鵠沼』15号「芥川龍之介晩年の消息」

その後、斎藤茂吉の子息、医者である北杜夫氏が書かれた「茂吉あれこれ」という文の中で、「龍之介に主に薬を出していたのは茂吉であった……阿片が麻薬とされたのは、戦後、進駐軍の指令によるもので、それまでは医師が処方することは許されていた。……阿片を少量使えば、いわばトランクライザーのような作用をする。」と。

川端康成も大正15年10月頃、龍之介の紹介で受診。ただし詳しい記録はない。

広田弘毅(昭和11年3月～12年にかけての総理大臣)宅にも往診に行っている。その折の広田氏、そのご家族の人柄について書かれている。『鵠沼』30号「広田弘毅氏と子母沢寛氏」子母沢寛とは直接の接触はなかったようだが、二人からの色紙を大事にされていたとのこと。

岸田劉生は大正12年9月、関東大震災に遭い京都へ住まいを移すまでの間、鵠沼に住んでいた。『劉生絵日記』の中で、娘麗子の往診を富士医師に頼んだことにふれている。

大正12年8月12日

「今晚一時半頃、麗子急に九度の熱になる。…蔡、福田さん(鵠沼海岸、東屋の近くで開業していた医師)へ行ったら夕方来る由。夕方ではたよりないので富士さんという医者と呼ぶ。はじめての人だが親切そうな医者なり…」

富士さんは大正11年鵠沼に来られて開業しているので、麗子は程なく“親切そうな医者”の患者となったと思われる。麗子10歳。(さとう かずこ)

富士 山医師と湘南学園

内 藤 喜 嗣 (会員)

富士 山先生と湘南学園との拘わりについて紐解いてみて、学園の揺籃期から始まり、創成期に至る永い歳月にわたって、先生が学園に対して注ぎ込まれたなみなみならぬ熱意と愛情が浮かんできました。

永らく広漠な地のまま放置されていたここ鵠沼南部の空気清浄、気候温暖風光明媚な地が保養地として注目され、明治中期に至り開発がはじまりました。

そして鉄道の開通、関東大震災などで、保養別荘地から大東京の衛星住宅地として発展、居を構える移住者が増えるに従って、よい医師と子弟の教育場、よい学校の問題が出てまいり、この問題に富士先生は率先、参画されました。

これについて先生ご自身が1986(昭和61)年、奥様の介護がてら綾瀬厚生病院に同伴入院された折りに「鵠沼の湘南学園について」の中でお書きになっておられました。この文は1991(平成3)年1月24日、96歳11月で逝去された後の、会誌『鵠沼』58号に遺稿として掲載されましたのをご紹介します。

『鵠沼の湘南学園について』

遺稿 富 士 山

「昨今朝、小田急海岸駅を下車して片瀬より第一踏切りを横切って北上する男女学生、夕刻にはその反対逆道をたどって小田急の鵠沼駅で乗車して藤沢方面に向う多数の男女学生、これが湘南学園の生徒である。湘南学園が出来て以来60年以上にもなるのにこれ迄湘南学園について語られたことがない様に思う、先年鵠沼百年史という単行本が出版されたがそれにものって居ないようだ、私は湘南学園の設立当時から関係があるのでそれについて以下語ろうと思う。大正の終り頃だったかと思うが、時の藤沢町長隈川基氏（かつてはロンドンの日本大使館の駐在武官であった）が私を招いて鵠沼に幼稚園のないのは淋しいと、そこで隈川町長と私と小田急沿線の玉川学園長の小原氏がよって相談し鵠沼幼稚園をつくることにした。場所は今の湘南学園の小学部の隣にあった二階建の木造家屋であった。園児は3人であった。

私は幼稚園の校医ということになった。それから小学校も出来て生徒も段

々増加し世界戦争の終った昭和20年には小学部は6 学生程になり人数も100名位になった。中学部も出来、当時校長は宮下先生といわれた中学の3 年が卒業して新設の高校に生徒はすすんだ。＜中略＞

世界戦争の終った昭和20年には学園の総生徒数は300名位だったかと思う。或日私は学園の朝の体操を見にいった。敗戦後は一切きちんと列を作る事は駐留軍により禁ぜられていたので、体操も列を作らずてんばらばらに集って、右を向いている者左を向いている者ばらばら、それが号令によって体操するというおかしなものであった。服装はてんてんばらばら、制服というものではなかった。

建物は始めは今の小学部のところに出来たが、追々生徒が増加して来て狭い市道をへだてて東の方に運動場を造った。更に4 米道路をへだてて東の方に高等部が出来た次第である。

私は最初から学園の校医であったが、終戦後学園の全生徒にツベルクリン反応行い、陰性者にはBCGを注射した。これは神奈川県は勿論、全日本でも始めの行動であった。ところが当初のBCGは注射部位が化膿するので父兄から文句がでた。私は化膿は困るでしょうが、それにより結核にかからぬのだから、よいではないかと慰めた。

BCGは東京市の結核療養所の創業で作られたものであるが、東京市（当時の）では広く広く試験するつてがないと云うので、二つの学校（湘南学園と藤沢町立高等女学校（引用者注：現神奈川県立藤沢高等学校）の校医をして居た私に東京市の療養所にいる友人から試験を頼まれたのであり、東京市、神奈川県はもとより全日本で始めての試みであった。その利用効果は認められるものと判明した。今湘南学園の発展を見るにつけ、設立の当初を思い出し感慨無量である。

（昭和61年7月16日92歳の記憶）」

上記のようにご自身語られた通り、湘南学園の創立に尽力されたのですが、ご記憶漏れもございますので、補足しながら富士先生のご功績を紹介致したいと思っています。

1929(昭和4)年に小田急電鉄江ノ島線が開通して、移住者がさらに多くなって来た1931(昭和6)年、住民の新しい学校の設立の機運が結実しました。

その中心人物は、内務省衛生局技師で健康のため鵠沼に移住していた氏原佐蔵

氏で、3月23日に文部省の認可を得て、私立爽明学園小学校ならびに幼稚園を設立しました。これには友人であった内務省技官の内山鑄之吉氏、予備役海軍々医少将で前藤沢町長の隈川基氏、富士山医師など、健康衛生と子弟の教育に造詣の深い方々の参画で、空別荘を借りて開校したものの、氏原氏の急逝と教育面の指導者難から立ち消えとなりました。

しかし、この芽は夫人の母堂が玉川学園創立者園長の小原罔芳先生の青年時代の後援者だった藤江永正氏に引き継がれ、ご母堂の紹介で教育面の指導者として小原先生の協力が得られることとなりました。

富士先生をはじめ前記の後援者の他に、新たに藤江永正氏、安部政次郎氏、大沼氏など教名の後援者が参集、また先の隈川氏の斡旋で後の経営後援者の東京螺子製作所社長の松本源三郎氏所有の屋敷(1500坪の敷地、30坪の家屋)の借用により、湘南学園が1933(昭和8)年4月に開校するに至りました。

その後、11月15日に安部政次郎氏を代表として設立者登記の変更、9年2月2日に校名の変更申請がなされ、晴れて「湘南学園」が誕生しました。

上記の手記のくぐりでは、小原先生の説得に、藤江氏、隈川氏、富士先生、安部氏が揃って訪れた時のことと思われます。

富士先生は当時のひ弱な別荘族の子弟の健康を心配され、開校時から25余年の間、校医、戦後はPTA衛生部々長として、父兄の医・薬関係者を結束、生徒の健康管理はもとより、保護者父兄を指導されてこられました。

1939(昭和14)年、学園の経営が困窮したおり、先の松本源三郎氏のご自身で学園の経営を受け継がれることになりました。氏は教育、公衆衛生に造詣が深く、発展する自社、東京螺子の社員の教育・スポーツ・鍛練に努められ、自前の技能者養成所及び青年訓練学校の設立、健康保険組合の設立を率先されました。

そして、同16年に東京螺子診療所、同17年には当時の民間企業としては稀有な予防医学研究施設並びに診療所を開設され、富士山医学博士を懇願、要請され、所長とされたのでした。

富士先生はこれに応え、当時増え続ける社員、全国から集められる徴用工員、学徒動員の学生工員を合わせた一万人を超す従業員の健康管理を徹底、大過なくく乗り切られたのです。

一方、学園については、小原先生の後任の選任に慎重を期し、経験豊かな意中の八木寿治氏を同17年4月、園長に迎えられたのでした。(同時に八木先生は東京螺子青年訓練学校の校長に就任、兼務)

八木先生は最初の朝礼の壇上より見た児童のひ弱な姿に驚き、上級教育を目指すには、秘めたる家庭環境、血筋、素質を延ばすための頑強の身体、忍耐力、規律正しい生活指導に妥協なしと、教育目標を保護者父兄に宣言、理解と協力を求め、新しい教育をはじめられました。

この八木先生の教育方針を支えたのが、富士 山校医と校主の松本源三郎氏でした。富士先生の診察、診療所を使つてのX線による健康診断、健康増進のための日々の肝油ゼリー錠の投与と、戦時中の物資窮乏の折りの好意でした。

終戦後、GHQの賠償工場に認定された東京螺子の苦境から、松本氏から譲られた湘南学園を受け継いだ父兄の財団組織において、苦難の道が始まりました。

新進気鋭の宮下正美園長を迎え、父兄会は新たなPTA組織となり、学園を支えました。その中の衛生部会長を買って出られた富士先生は、保護者の中の医師、薬剤関係の方々を結集、児童の健康管理を図られました。

内科、眼科、歯科、耳鼻科の検診、ツベルクリン反応試験、X線診断、検便などを進められ、学園通信での統集計の発表で保健衛生の啓蒙を進められました。

チフスが流行れば多方面から薬剤を集められ投与し、当時日本人の多くの人の体内に寄宿して居た回虫などの寄生虫の家族ぐるみの駆除に必要な薬剤の調達を指揮されたり、先のBCGの注射の件も先生の永年の研究に基づく安全と効果の確信からの行為であったと思います。

湘南学園も発展し、新制高等学校開設に際し、校地、校舎確保に東京螺子の徴用工の旧宿舎が候補に挙げると、松本氏の信頼厚い富士先生は率先して仲介に当たられ、柳小路（B地区）校舎（現鵜沼高校）が誕生したのです。

富士先生は学園のPTA機関誌『学園通信』に保健衛生部の報告、啓蒙記事を多く寄稿されていますが、そのうちの一文と、また戦後の創成期の宮下園長が書かれた富士先生の功績を讃えて書かれた第7号の巻頭文をご紹介します。

食事の衛生的しつけ

校医 富士 山

1. 食前のしつけ

食前に手をよく洗い、口うがいしてから食事にかかるようにして下さい。

2. 食事中のしつけ

沢山の副食物をならべて「どれでも好きなものをとっておあがり」という親がいる。これは「御前を偏食者にしてあげましょう」というのと同じで

ある。偏食をさける方法は食物の量と質を充分に考え、子供各自に対する食量をあらかじめ盛りあたえ「残さずにたべなさい」と注意し実行せしめることである。

食事はゆかいにすること、小言をいわねばならぬことがあっても食後にのばすこと、けだしゆかいに食事することは消化液の分泌をたかめ、消化吸収を促すからである。また食事には時間をかけ十分にかんでのみ下させる習慣にすること、これは消化吸収の率をたかめる、友達が門口にまつていたりすることは落ちついて御飯をたべなくなる因となるから、一応友達のかえってもらって後刻きてもらうようにする方がよい。

御飯にお汁でも何でもかけ、かきまぜてくうくせの者がいる。これは犬ぐいと称し下品の極である。親はかゝる習慣におちいらないよう注意すること。カレーライスだけは別問題である。飯に汁気のをかけて食することは口中のそしゃくを短くし、唾液の分泌が減少する。従って胃内の消化に時間がかかることになる。御茶漬けさらさらは是非やめねばならない。

3. 食後のたしなみ

食後には適量の湯で口中を清めながらのみ下だす、適当温度の湯は胃液分泌には別に影響がない。また湯をのんだからとて胃液がうすくなるというものでもない。食後直に運動などしないで五分内至十分は静かにしているのがよい。

獸身而して成心

宮下正美

この頃、学園の生徒たちの頬の色が目立って赤味を増し、つやも出て来て、眼の光も明かるく生き生さして来たのを見て喜んでいます。気のせいかも知れません。しかし、四月の初め頃に見られたような前ごごみに両肩をつきだし、背中を丸くして歩いている生徒はたしかに少なくなって来ました。そして、この地方の子どもは土地や気候の関係でそうなのではなからうかと、考えさせられたほどたくさんの生徒の鼻の下がきたなく濡れていたのも、今はもう殆ど見られません。冬がめぐって来たというのに、かえってこうした結果が眼にうつって、意外な心持で嬉しく思っています。

検診の結果は、陽性反応を示した何人かの生徒もレントゲン写真によって示された事実と照らして見ると、心配しなければならぬ体のものは一人もい

ないことがわかりました。これも嬉しい。衛生体育の係りの佐藤先生が、眼を輝かして報告して下さった時、これは教育に於ける一つの勝利だと思いました。

私は微笑をかくすことができませんでした。しかも佐藤先生は、「園長の喜び方はまだ足りない」と、くっつかかるほどの熱心さで、この点学園の力を入れている保健衛生の方面によい前進の見られたことは何といっても大きな今年の収穫です。もちろん、家庭の積極的な注意と、やれ注射だ、やれ検便だ、それレントゲン写真だと、学園がつぎつぎに申し出る注文に面倒がらず従って下さった熱意とに、敬服しなければなりません。又、これは校医の富士先生の並々ならぬ好意にもとづくものであることも忘れてはならないでしょう。先生のような献身的な校医がどこの学校にあるであろうか、ほとんど無報酬で、労力と時間を惜しまず「湘南学園の生徒を、模範的に健康な生徒にしたい。」と口ぐせにおっしゃって、たえず校門をくぐられるのである。

もともと、鵠沼の地方の子どもは、いわゆる昔の保養地の子どもとして、蒼白い、か細い軀と神経質な心をもつ弱々しい子と眺められて来ていました。

学園の昔もそうであったと聞きます。しかし、今後はもうそうであってはなりません。

「まず獣身、而して後、成心」とは、福沢諭吉先生のお言葉です。獣身という言葉は、文化人には凡そ縁の遠い言葉のように聞えますが、けっしてそうではありません。たくましい軀にこそ、よい文化人たる精神が盛らるべきでしょう。

明かるい、楽しい、のびのびした声や動作を眺めながら、私はいつも生徒たちの生命永く、日本の将来によき足跡を残し得る、よき人物となるように望んでいます。冬が来ても、彼等の何人かは、砂地を裸足でかけまわっている。強制は少しもしていない。むしろ心配して、大丈夫かと聞けば、「大丈夫、平気ですよ。」とにこにこしている。

乱暴な話かも知れませんが、自然に、無理をしないで、そしてたくましく彼らは生長していく。学園の一人の生徒も、病にたおれさせてはならない。こうして次に進む方向こそ最も合理的な、知育であり、徳育であります。

私は大きな喜びをもって、この事業を報告して、今年の最後の一つの成果としたいのであります。

(ないとう よしつぐ)

富士 山氏略年譜

西暦	和暦	月	日	記	事
1894	明治27	2	15	東京にて誕生	
1920	大正 9	12	20	東京大学医学部医学科卒業→翌日付で同大学医学部物療内科勤務	
1921	大正10	1	22	医師免許証下附第46590号を以て医籍に登録	
1922	大正11	8		母と共に鶴沼6708に移住、研究の傍ら診療所開設	
1923	大正12	2		結婚	
1923	大正12	8	12	岸田麗子(岸田劉生の長女)を往診	
1925	大正14	12	31	東京大学物療内科を依願退職	
1926	大正15	7	27	芥川龍之介を初診。神経衰弱と診断。7/28・8/7・8/11・8/16にも処方	
1926	大正15	8	7	芥川龍之介、富士医院に来院。8/18にも再来院	
1926	大正15	10		川端康成、芥川龍之介の紹介状を持って来院	
1927	昭和 2	4	1	東京大学医学部血清学教室にて免疫学を研究	
1930	昭和 5	4	30	東京大学血清学教室を依願退職→翌日より東京市立大久保病院に勤務	
1931	昭和 6	4		東京市立大久保病院を依願退職→翌日より東京大学医学部小児科に勤務	
1931	昭和 6	7	24	東京大学より医学博士号授与	
1931	昭和 6	8	31	東京大学医学部小児科を依願退職→翌日より診療所開設	
1933	昭和 8	4	1	湘南学園、開園。準備段階から設立に尽力。校医に就任	
1935	昭和10	10		文藝春秋10月号に『芥川龍之介の憶ひ出』掲載	
1941	昭和16	3	31	診療所閉鎖	
1941	昭和16	4	7	(株)東京螺子製作所入社。予防衛生研究所長・厚生保健部長・診療所長	
1942	昭和17			神奈川県医師会藤沢支部理事に就任	
1948	昭和23	5	28	神奈川県労働衛生協会初代会長に就任(2年間)	
1951	昭和26	10	1	神奈川県結核審査協議会委員を委嘱される	
1952	昭和27	8	18	株式会社東京螺子製作所を定年退職	
1953	昭和28	6	1	厚生省より地方技官に任ぜられる→神奈川県民生部保健課に勤務	
1953	昭和28	6	1	神奈川県社会保険診療報酬支払基金審査員を委嘱される	
1953	昭和28	6	1	神奈川県国民健康保険団体連合会診療報酬支払基金審査員を委嘱される	
1954	昭和29	5	1	神奈川県技術吏員に任命→民生部保護課に勤務	
1955	昭和30	5	1	神奈川県医療扶助審査会委員を命ぜられる	
1955	昭和30	11	1	兼ねて民生部児童課に勤務	
1976	昭和51	7	1	神奈川県民生部を退職→以後、しばらくして鶴沼を語る会に入会	
1980	昭和55	1	31	会誌『鶴沼』9号(1980年の会員の声 鶴沼と私)	
1980	昭和55	10	23	例会講話(長寿の秘訣)	
1981	昭和56	1	15	会誌『鶴沼』11号(芥川龍之介氏の憶ひ出+第5号・第9号の訂正)	
1983	昭和58	3	8	例会講話と会誌『鶴沼』13号(「鶴」について)	
1983	昭和58	7	12	例会講話と会誌『鶴沼』15号(芥川龍之介晩年の消息)	
1984	昭和59	3	13	例会講話と会誌『鶴沼』19号(龍之介の住んだ二階建の家について)	
1984	昭和59	5	8	例会講話と会誌『鶴沼』20号(前回補正+桜貝と浜木綿についてなど)	
1984	昭和59	7	10	例会講話と会誌『鶴沼』21号(桜貝の訂正と、防風に追加)	
1984	昭和59	9	11	例会講話と会誌『鶴沼』22号(ハランかスルガランか)	
1984	昭和59	11	13	例会講話と会誌『鶴沼』23号(芥川龍之介晩年の消息補記+月光の女)	
1985	昭和60	1	8	例会講話と会誌『鶴沼』24号(『鶴』について)	
1985	昭和60	3	12	会誌『鶴沼』25号(明日香に遊んだ思い出)	
1985	昭和60	5	14	会誌『鶴沼』26号(国歌「君が代」の文句は今のままでよいのか)	
1985	昭和60	9		会誌『鶴沼』28号(トルストイ復活の歌)	
1985	昭和60	11		会誌『鶴沼』29号(今様)	
1986	昭和61	2		会誌『鶴沼』30号(広田弘毅氏と子母沢寛氏)	
1986	昭和61	9	9	会誌『鶴沼』33号(鶴沼の尼寺さん)	
1991	平成 3	1	24	逝去 享年96歳	
1991	平成 3	3	5	会誌『鶴沼』58号(鶴沼の湘南学園について=遺稿)	

〔再録〕 政治を離れ、一民間からの初報告

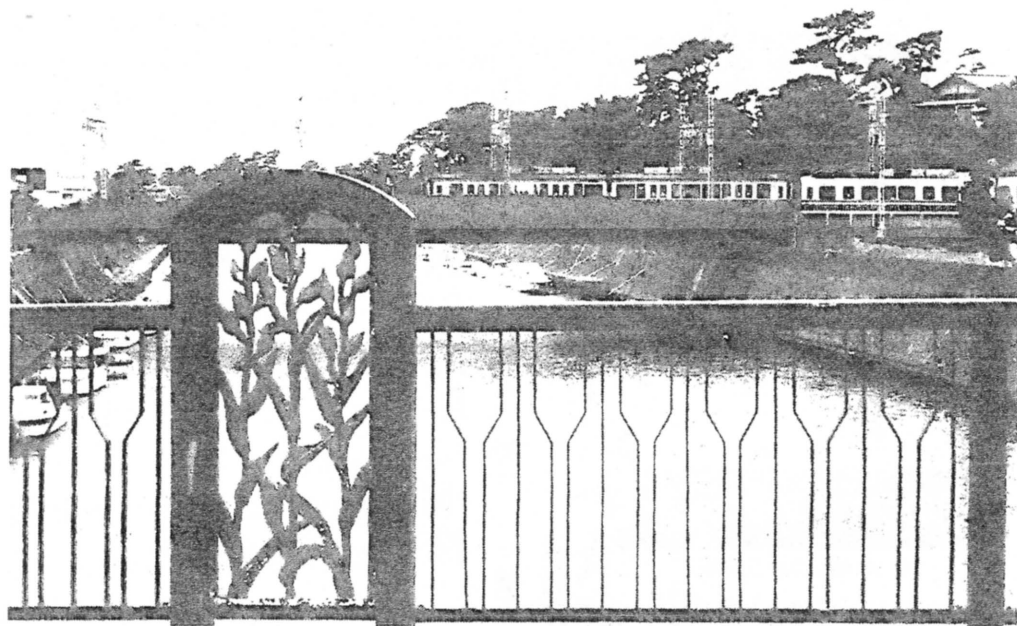
幻の鵠沼蘭は生きていた

番 場 定 孝（会員）

かつて相模湾の長い海岸線は平坦な砂丘がどこまでも続き、鵠沼辻堂を中心とした砂丘と内陸まで広がる松林は文字通り名勝湘南の白砂青松と人々の憧憬の地であった。

昭和 57 年 6 月県議会で当時の長洲知事に提案を試みた。「かつての湘南海岸には多くの原生植物がありました。特にハマボウフウ、松露は有名で、今日ではその天然の味覚を全く窺い知ること出来ません。地名がそのまま名称になっている鵠沼蘭はその本家本元でも一草たりと見ることも出来ません。」（議事録より）

県立図書館で調べると誠文社『原色日本のラン』には次の記述がある。「宮城県から神奈川県までの太平洋沿いの砂質の疎林中に散生する地生のランで（中略）花期は 4 月下旬から 5 月中旬にわたる。和名は鵠沼という地名で今は神奈川県藤沢市に属し、すっかり市街になったが以前は前面に江の島を控えた静かな保養地



江ノ電も見ているクゲヌマランのレリーフ（さかい橋）

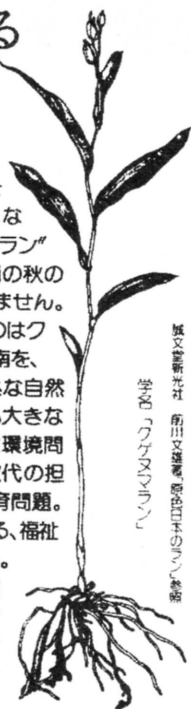
自然が教えてくれる 今日までの湘南 そして、明日から

かつては白砂青松を誇った湘南海岸、そこには数多くの原生植物が見られました。なかでも、生息地鶴沼の名を冠した「クゲヌマラン」という野生ランは、10数年前に絶滅。湘南の秋の味覚といわれた「松露」の姿も最早ありません。

何の保護もなく時代の犠牲となったものはクゲヌマランや松露に限りません。現在の湘南を、私たちの生活環境を考えると、この小さな自然の死が投げかけた意味、それはあまりにも大きな問題が含まれています。公害に端を発した環境問題、私たち住民のモラルの問題、そして、次代の担い手に正しい伝統を受け渡すという、教育問題。さらには、思いやりこそがその原点でもある、福祉問題にまで言い及ぶこととなります。

自然が教えてくれた、本質を見極める確かな視点。これこそが、今、県政に携わる者に要求されるいちばん大切なアングルではないでしょうか。—— 番場 定孝

パンフレットの序文とクゲヌマラン



本文提供元 南川文雄氏 提供元 南川文雄氏 提供元 南川文雄氏

であった。1935 年頃ここに病を養っておられた植物生化学の服部静夫博士がこのランに注目され（中略）現在では土地開発で松林はほとんど伐られて、ハマカキランと共に貴重な Type locality の植生が失われたのは残念である。」神奈川県植物物語には「東京大学の生化学者服部静夫が採集し、同大学で研究されていた前川文夫が調べ 1936 年に新種として東亜植物図説に図をつけて発表した。」とある。

元藤沢市立高谷小学校長の諏訪松男先生は植物に詳しく、特に野生蘭の専門家で各地で講演し、愛好家グループと松林やお屋敷の庭を訪ねては鶴沼蘭を探していた。しかし何年歩いても見つからず、先生すら実物は未だ見たことないといっていた。

先の私の提案は砂防林や砂丘にかつての原生植物を復活させ、人々の散策と憩いの場所を創ったらどうかというものであった。しかし鶴沼蘭は既に幻になってしまったのか。否、いずれ何処かで見つかるはずだ。昭和 58 年 4 月は県会二度目の選挙となる。

幻 クゲヌマラン見つかる

絶滅と紹介した希少な植物のパンフきっかけ

県の天然記念物クラス

他にも自生の可能性



東大に持ち込み確認

藤沢の海岸に100株

幻のクゲヌマラン発見

藤沢市内の砂丘地帯

昭和58年(1983年)5月22日 日曜日

湘南読売

報道されるクゲヌマラン発見のニュース

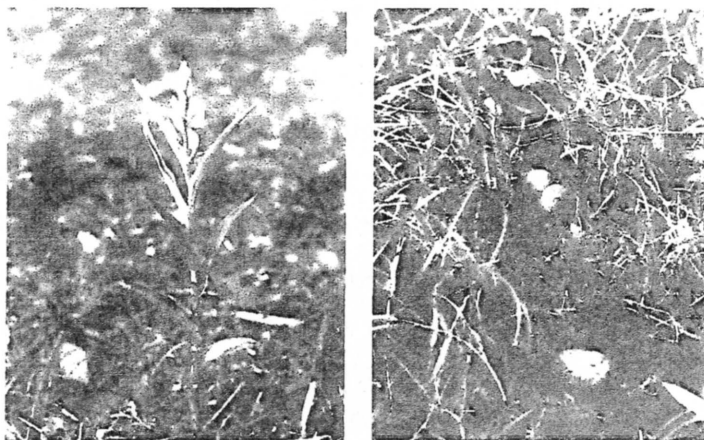
そこで後援会用のパンフレットを作成しなければならない。そうだ、これに鵠沼蘭を載せれば何か反応があるかも知れない。同時に湘南の原点を教えてくれる環境問題の象徴ともなり得ると考えた。当誌に掲載いただいた序文と蘭の図はこうして出来上がった。激しかった選挙も幸い当選出来た。その直後だ、うちにパンフレットと同じ蘭があり、毎年4月中旬すぎに白い花をつけます。松露も一緒に」との電話。正に青天の霹靂で、誰もが思った絶滅から再発見の瞬間であった。

A氏宅は鵠沼ではなかった。JR線から約1kmも北に向かった所である。A氏と母上に案内され庭園に入る。そこには築山ではなく昔からの小山があり小さな松林を形成していた。松と松の間の背の低い雑草地の中に、ここに一本そちらに一本としっかりした茎と青緑色の葉、そして可憐な白い花が点々と見えるではないか。これが鵠沼蘭か。すぐ側に少し背の高い葉の広いハマカキランもある。A氏は松の落ち葉をかき分けて浅く掘り、松露も見せて下さる。いままで調べて来た資料どおりの植生がこの小山に存在するではないか。ここは周りの地形からしてかつての砂丘でその名残ではないかと思った。私の町内の塩沢務氏（元鵠沼を語る会会長）は諏訪先生と一緒に鵠沼蘭を探し回っていた一人だ。私が選挙の後始末で時間が取れず、塩沢氏に諏訪先生紹介の大学の先生に会って頂くことになった。そして東京大学で1936年の服部博士採集の標本と照合することができ鵠沼蘭と確認、ついに真正とのお墨付きを頂戴する。

以上が、鵠沼蘭再発見の一部始終である。

翌年春には鵠沼在住のT氏から連絡があり、この時は諏訪先生が直接調べて確認した。その後JR線の南側でも発見されている。具体的に報告出来ないのが残念だが、山本市長も乗り出し大学に植生を研究依頼され、現在も市が観察を続けている。鵠沼蘭は環境の変化に大変繊細な植物だ。自然が教える湘南の原点を知ることは大切だ。鵠沼蘭はその象徴であり、今後もずっと生きてほしいと願ってやまない。

（ばんば さだたか）



A氏宅のクゲヌマラン(左)。ショウロ(右)と共生している。

近年、鵠沼に住みついた蝶

竹内 広弥（会員）

今年は、やたらとアゲハチョウの類が多い。50年前、鵠沼中・生物部時代の頃に比べれば鵠沼の蝶の種類は大幅に減った。今日、鵠沼で確認できる種類はおおよそ25種類ぐらいか（50年前は40種類以上）。この数十年の間、特に1960年代に入り鵠沼も宅地開発が急速に進み、蝶の棲息に欠かせない食草が大きく様変わりしたためであろう。しかし一時に比べここ数年、蝶の数だけは増えてきている感がある。また地球温暖化で南の方にしか棲息しなかった蝶が北上を続け、鵠沼辺りにも飛来し近年しっかり土着した。なかにはアライグマやタイワンリスなどと同じく移入種の蝶もいる。ここ数年のうちに鵠沼の新顔となった蝶の代表としてツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、アカボシゴマダラの3種類が挙げられる。



ツマグロヒョウモン♀

■ツマグロヒョウモン■

あれ！ ちょっと違う蝶だ。ひらひら飛ぶ蝶を追いかけて、翅紋を確かめる。前翅の先端が鮮やかな黒色に白帯。ツマグロヒョウモンのメスである。鵠沼でこの蝶を初めてみたのは2001年。その数は急速に増え、秋にはコスモスやニチニチソウに飛来するようになった。「ツマの黒い豹紋蝶」はメスの翅紋によるネーミングでオスの前翅

には顕著な帯はなくメス、オスの違いは明らかである。もともと西日本にだけ棲息していた蝶だが温暖化の影響で年々北上し、関東一円にまで勢力を広げてきた。

9月、庭のスミレやパンジーの葉が食い荒らされているのに気づくと、そこには黒地にオレンジのストライプが入った毒々しい毛虫がいる。これこそツマグロヒョウモンの幼虫なのだ。食欲は旺盛でスミレの葉をたちまち食べつくす。パンジーなど園芸植物を食草とするツマグロヒョウモンは市街地に多く見られ、鵠沼は格好の住処となった。毎年今頃は、鵠沼のあちらこちらでツマグロヒョウモンが飛び交い、食草のスミレの葉にトゲトゲした幼虫が一杯つくのに今年は少ない。年により発生の状況が異なることは珍しくないが、ちょっと気になるところだ。



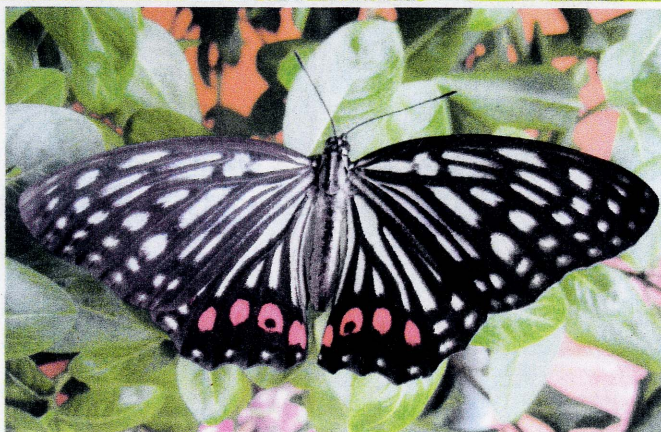
ツマグロヒヨウモン♀と幼虫

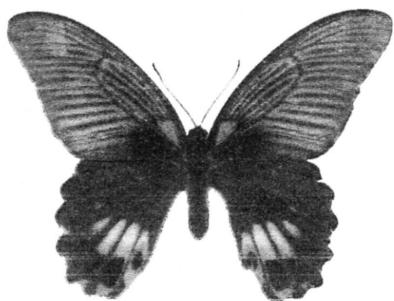


ナガサキアゲハ♀と幼虫



アカボシゴマダラと幼虫





ナガサキアゲハ♀

■ナガサキアゲハ■

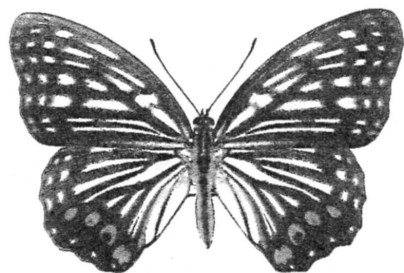
2001年の秋、庭のニチニチソウに大きなアゲハチョウが飛来、ゆったりと翅を動かしている。前翅のオレンジの紋、後翅の線状白紋が実に鮮やか、尾状突起がない。まさしくナガサキアゲハのメスだ。何しろ大きい。後翅に突起がないのがナガサキアゲハの特徴ということは分かつ

ていても、実際目の前で大きく翅を広げている姿をみると驚き以外なものもない。地球温暖化が進んだとはいえ、夢中で捕虫網を振っていた中学時代には、この鵠沼にまでナガサキアゲハがやってくるとは想像すらしなかった。今年の夏はクロアゲハが多量に飛び交い、その中に混じって一際大きく真っ黒な蝶がいる。ナガサキアゲハのオスだ。鵠沼海岸のマリンロードを悠然と飛ぶその姿は実に見事であった。毎年、秋のヒガンバナが咲く頃まで、その大きな姿をみることができる。

日本で初めてこの蝶を発見したのは、かの有名なシーボルト博士。発見された「長崎」にちなんで命名された。食樹は柑橘類でザボン、ナツダイダイに多く産卵、ナミアゲハ、クロアゲハと似た幼虫となる。

■アカボシゴマダラ■

この蝶は温暖化のせいで鵠沼辺りを飛び交うようになったのではない。もともとは中国本土に棲息する蝶で、誰かが藤沢・新林公園辺りに放ったのではないかとされている。この蝶が藤沢市内で初めて発見されたのが、1998年。以来、新林公園はアカボシゴマダラ



アカボシゴマダラ

の棲息地として蝶マニアの間で一躍有名になった。今年5月に新林公園のエノキ周辺を敏速に飛び交う春型を何頭も見かけ、鵠沼では7月に新田山近くの樹木の周りを舞っているのを目撃、9月には自宅庭で捕獲。県下の棲息地は急速に広がり、冬には藤沢駅近くのエノキの植え込みでも越冬する幼虫が見られるとのこと。オオムラサキやゴマダラチョウと食樹が同じで、当面は棲息地を同じくする在来種のゴマダラチョウと幼虫期に競合するのではではないかと危惧されている。

(たけうち ひろや)

* ナガサキアゲハとアカボシゴマダラの幼虫写真提供：岸 一弘氏

映画俳優 ^{さぶり}佐分利 ^{しん}信…芸名の由来

会 員 岡田 哲明

佐分利信といえば日本映画史に残る名優として広く知られている。松竹が1936(昭和11)年1月に、蒲田から大船に撮影所を移したのに伴い、監督、俳優、スタッフなどが湘南に居を移した。例を挙げるなら、笠智衆は鎌倉に住んだ。監督の小津安二郎は茅ヶ崎に定宿が出来た。そして佐分利信は鵜沼(鵜沼松が岡3・6・9:鵜沼橘1・5・1)に数年間住んだので鵜沼の住人にとっては格別の親密感のある映画俳優であるが、その芸名の由来を知る人は少ない。

佐分利は当初、日活の俳優として映画界に入った。その時の芸名を島津元といった。それが松竹に移るにあたって佐分利信と改名したのである。改名のいきさつと背景について調べてみた。

* * *

おいたち

佐分利信は本名を石崎由雄といい1909(明治42)年2月12日北海道空知郡歌志内村の炭鉱長屋に生まれた。父は明治30年代に北陸から移民した夕張炭鉱歌志内鉱の炭鉱夫であった。9人兄弟で生活は苦しく、1923年歌志内尋常高等小学校を卒業すると中学教師になろうと上京する。神田三崎町の苦学生の溜まり場に入りこみ道路工事など肉体労働で学資と生活費を稼ぎながら正則英語学校や夜間中学を転々とする。が、結局どこも卒業出来ず郷里に舞い戻り、歌志内尋常小学校の代用教員と



佐分利 信

なる。しかし上京失敗者への風当たりは強く居づらくなって半年で止め、神戸へ行き友人と婦人新聞の発行を計画するがこれも失敗する。再び上京し、兄の家に居候するうち、活動屋にでもなろうと1929年4月、多摩川向ヶ丘にあった日本俳優学校に入り監督を志望する。同期にシナリオ作家・館岡謙之助、監督・吉村廉などがいた。

日活入社

1930年10月、日本俳優学校を卒業。俳優学校の先輩で日活太秦撮影所の俳優小杉勇と助監督の八木保太郎をたよって京都に行き、二人の斡旋でその年11月、日活に入社した。薄給で食えないので八木保太郎の家に転がり込み後の監督・春原政久らとともに三食付きで世話になっていた。監督を志したが俳優をすすめられ島津元という芸名で大部屋俳優となった。

日活時代

1931年4月、内田吐夢監督の「日本嬢」^{ミスニッポン}に左翼の闘士役でデビューした。10月「動員令」で主役。翌年、新人女優黒木しのぶと「さらば東京」で共演し、やがて二人は恋愛関係に落ち同棲する。1933年結婚。その年、島津は日活を去る。その理由は定かではないが当時、日活太秦では200人をクビにするような労働争議が起こったりしているからそれに加担したのかもしれない、なにせ初めての役が左翼の闘士だったのだから。また、一説には有望新人女優を若造俳優にさらわれた日活が腹の虫が治まらずクビを切ったとも言われている。このほうが話としては面白い。

なお、夫人の黒木しのぶは本名、永田錦。1910年5月15日北海道札幌市生まれ、市立高女卒業後、女流作家を志し北海タイムス社編集部勤務したが上京する。銀座の酒場フレデルマウスのホステスをしていた1932年1月にスカウトされて日活に入社した。「さらば東京」はデビュー作である。大きな瞳とエキゾチックな容貌で将来を期待されていたが島津と結婚の翌年に退職している。



黒木しのぶ

日活から松竹へ

さて、日活を出た島津元は大阪劇団に身を寄せていたが35年8月、松竹蒲田に入社することになる。松竹入りの労をとったのは当時、塚本靖のペンネームで映画評論を書いていた東宝の藤本真澄である。藤本は、松竹蒲田の監督、五所平之助が小津安二郎、成瀬巳喜男らと組織していた新人養成のためのグループ「スタジオF」のメンバーだったことから、五所に島津元を紹介した。藤本が島津とどのようにして知己を得ていたかは不明である。

五所は師匠の島津保次郎と相談し、上原謙が入社したばかりでこれといった若

手スターのいなかった松竹蒲田に入れ、若手二枚目として売り出すことになった。

芸名は佐分利 信

五所平之助の師匠、島津保次郎が「おれと同姓じゃまずい」というので芸名を改めることになった。五所は藤本と図り、それより6年前(1929年)箱根富士屋ホテルで謎の死を遂げてジャーナリズムを騒がせた駐支公使、佐分利貞男(さぶりさだお)と、東宝の美術部長で東京宝塚劇場に2.4m×18mの大壁画を描いて話題になっていた画家の佐分真(さぶりまこと)にちなんで苗字を佐分利(さぶり)、名前を信(しん)と名付けた。信は真の音読みからきたものか、あるいは上原が謙(謙信)だから信(信玄)と名付け二枚看板として二人を競わせようとしたのか、とにかく佐分利信はこのようにして誕生し1935年10月「あこがれ」で松竹デビューを果たした。この映画は塚本靖(藤本真澄)の脚本、五所平之助監督、相手役は高杉早苗であった。東宝の人間の脚本で松竹が撮るというのは一寸理解し難いが当時はそんなことも、しばしばあったのであろう。

上原、佐分利に佐野周二が加わり世にいう「松竹三羽鳥」となるのはこの翌年のことである。

映画会社に美術学校出を採用したのは松竹の大谷竹次郎の女婿で松竹蒲田撮影所長だった城戸四郎が最初である。1929(昭和4)年夏、ヨーロッパ視察旅行から戻った城戸は、いわゆる「蒲田調」を作り出す上で大きな役割を果たす要素として美術監督に斬新な感覚と方法意識を持つ若い美術家たちを入所させた。東京美術学校出身の洋画家脇田世根一を美術部長に迎え、1920年代末にその後輩たち、河野鷹思、金須孝、水谷浩らを入社させ、広告デザインや美術監督に腕を振るわせた。それは他社の追随する所となり1934年1月、二度目のフランスから帰って間のない佐分真と益田義信を東宝は美術部長に迎えたのである。

五所に相談された藤本は、のちに東宝専務取締役役になつた男で当然、美術部長の佐分真と面識があったわけであり“さぶり”というのは藤本の発案であった可能性が高い。

では芸名のきっかけとなった二人の“さぶり”とはどのような人物か、また新聞紙上で騒がれた謎の怪死事件とはどのような事件であったのか、そのあらましを述べよう。

佐分利 貞男

佐分利貞男は 1879 (明治 12) 年 1 月 1 日、広島県福山の生まれ、代々、佐分利流槍術指南役として福山藩に仕えた家柄であった。長兄は一嗣といい、工学博士で、清水トンネルの最初の設計者として知られる。中兄はのちに東洋紡績に合併された大阪の合同紡績の社長だった秋山広太である。貞男は兄、一嗣から学資を貰って 1905 (明治 38) 年、東大仏法科を卒業、外交官補となり、外務省参事官、大使館参事官、通産局長、条約局長を歴任。1927 (昭和 2) 年、英国大使館参事官となり 29 年の夏には駐支公使となった。夫人の文子は明治の外務大臣小村寿太郎の娘である。いわばエリート中のエリート官僚であり将来を約束されていたが妻、文子は早くに他界していた。



佐分利貞男

「佐分利公使の謎の死」事件

1929 (昭和 4) 年 11 月 28 日の夜、12 時近く、箱根宮ノ下にある富士屋ホテルに雨の中を自動車で一人の客が入ってきた。それは、このホテルの常連客である佐分利駐支公使であった。彼は温かい紅茶と茹で卵をとり、「翌朝 10 時 15 分東京着の汽車で帰るから 6 時 30 分に起こして欲しい。7 時には床屋を呼んで置いて貰いたい」と頼んで入浴、就寝した。翌朝、女中頭が 6 時に佐分利の宿泊室 97 号室のドアをノックしたが返事がない。女中頭は支配人にこの事を報告、支配人が行ってノックしたがやはり応答がない。ドアは内側から鍵が掛かっている。思い切って横の窓から室内に入るとベッドの上で右手にピストルを握った浴衣姿の佐分利公使が死んでいるのを発見した。というものである。

自殺か殺人事件か判断が分かれ 2 度の屍体検証がなされた。最終的に警察の見解は自殺ということになるのだが、密室殺人の疑いの極めて濃い事件であった。

自殺説の主な根拠は、1) 佐分利は妻を亡くして以来、独身生活が続き淋しうであった。ホテルで亡妻を思い出し発作的に自殺したというもの。2) また日支問題の交渉の多難さに自信が持てなく絶望感に襲われたのではないか。3) 侵入者の痕跡が見当たらない。などであった。一方、他殺説は、1) 本人は左利きであったから右手にピストルを持つのは不自然である。2) ピストルも普段、彼が携行していたものと異なり軍部が使用する大型のものである。3) 翌日の予定をホテルの人に通知している。4) ホテルの浴衣のままで自殺するとは彼の性格

からいって考えられない。といったものであった。殺人ならば犯人は誰か、金品が手付かずであったから物取りではない。政治的意図を持った暗殺であったであろう。この事件について更に知りたい方は松本清張の『昭和史発掘2』のなかに「佐分利公使の怪死」として詳しく取り上げられているから御一読をおすすめする。…佐分利の怪死は、もはや、一切の手掛かりを失っている。しかし、筆者は自殺よりも他殺を強く推定したい。まだ生きていた頃の丸山鶴吉（当時の警視總監）は、この事件をひとにきかれて「あの事件の真相は日本の国体が変わった時に初めて判る」といったという。この辺の所が真相かもしれない。…と松本清張は文末を結んでいる。

佐分 真

佐分真は1898(明治31)年10月8日、父、佐分慎一郎、母、田中たまの長男として名古屋で生まれた。佐分家は代々、尾張一宮の眞清田神社の宮司であったが慎一郎は教職ののち一宮銀行、一宮紡績株式会社の役員を勤め、一宮瓦斯株式会社、一宮電気株式会社の設立取締役役に就任、また一宮町長を勤めた。のちに名古屋にも進出し実業界に足跡を残した。母は名古屋の造り酒屋田中嘉七の娘で名古屋花柳界で名妓と謳われた芸者であった。



佐分 真

母たまの実弟、田中徳次郎は小林一三とともに慶応義塾から三井銀行を経て鉄道事業および電力事業につくした盟友である。佐分の東宝美術部入社は田中徳次郎が小林一三に甥を推薦したものとみて間違いない。

真は名古屋市立菅原小学校、県立愛知一中と進み5年生の時、画家を志望し東京の郁文館中学に転校、川端画学校夜間部に通い、美校受験のため実技を学んだ。

1916年、東京美術学校西洋画科に入学。21年、滝ノ川町西ヶ原1081番地にアトリエを新築。敷地400坪、美校同期の建築科生、田口戌光設計による洋風2階建の住まいとアトリエ、当時日本一のアトリエと称されたという。学生のうちにこのような豪奢なアトリエを建てて貰うというのは前代未聞である。この建物は現存し、日本建築学会編『日本近代建築総覧』にも収録されている。

1922年、美校卒業、土屋しげ子と結婚。23年長男純一出生。26年しげ子死去。27年渡仏、30年一時帰国、31年『貧しきキャフェの一隅』で帝展特選。再渡仏。32年帰国。33年『画室』で再度帝展特選。34年東宝美術部長就任、『室内』

で2年連続3度目の帝展特選を受ける。1935年東京宝塚劇場階段ホールに壁画を描く。1936年4月23日自宅画室で縊死した。38歳であった。

佐分真の自殺も謎を秘めている。名古屋から上京していた母たまと息子純一をつれて上野鈴木亭で落語を楽しんだ翌日のことであったという。

夫人を早くに亡くし、一人息子を母に預けての孤独な日常ではあったと推察できるが経済的にも才能にも恵まれていたにもかかわらず、なお死に迫いやったものは何か。芸術上の行き詰まりか。松田改組に端を発する美術界の混乱に失望したか。家庭の事情か。純一氏によれば個人的な家庭の事情を一番の要因としておられるようである。



滝ノ川のアトリエ

遺族は新進画家奨励育成のために「佐分賞」を設定し毎年一千円を奨励金として拠出した。戦争のため第7回を持って中止されたが、受賞者のその後の美術界での活躍をみれば、この賞の意義の大きさが分かるであろう。受賞者を列記すれば以下のとおりである。

第1回 (1937年) 青山義雄

第2回 (1938年) 庫田登、笹岡了一

第3回 (1939年) 島崎鶏二

第4回 (1940年) 香月泰男、棟方志功、竹谷富士雄

第5回 (1941年) 松井正

第6回 (1942年) 中村節也、久保守

第7回 (1943年) 杉本健吉、山田正

なお、選考委員には藤島武二、梅原龍三郎、安井曾太郎、藤田嗣治、長谷川昇、伊藤廉、福島繁太郎、宮田重雄、小寺健吉、山喜多二郎太、益田義信、窪田昭三、伊原宇三郎、田口省吾が名を連ねている。

* * *

それにしても俳優佐分利信誕生の前後とはいえ、二人の“さぶり”が共に、妻

に先立たれ、将来を嘱望されながら不慮の死を遂げるという符合は単に偶然の一致では片付けられない運命的なものが感じられる。

佐分利信も妻に先立たれるが、俳優として大成し、後年には念願の監督としてもメガホンを握った。82年9月22日肝臓ガンのため73歳で世を去るが天寿を全うしたといえるであろう。

* * *

私は2005年9月11日、中部政次郎氏のご紹介で佐分真^{なかべ}の従兄弟にあたる佐分義雄氏にお目にかかる機会を得た。氏は四高から東大経済学部卒業、中部電力役員をされた温厚な紳士である。席上、私が「私の母と佐分真の妹の保子さんは名古屋第一高女で同級生。二人は親友でしたから結婚後も交際は続き、私も母と共に何度かお会いしたことがある。佐分真は私にとって身近な存在の画家なのです」と申しあげると、氏は佐分真についていろいろお話下さった後、ヒョイト「俳優の佐分利信は画家の佐分真からヒントを得て付けられた芸名だよ」と言われ、そのいきさつを話された。お話の中で、なぜ松竹の俳優に東宝の美術部長の名がかかわるのかのご説明は無く、私の疑問として残っていた。たまたま藤沢市総合図書館の蔵書、キネマ旬報社刊『日本映画人名事典男優編』佐分利信の項を担当された映画評論家千葉伸夫氏の記述によって藤本真澄の介在を知り、この疑問は氷解し、本稿にまとめる事が出来たのである。画家佐分真について、つい多くを書いてしまったが、以上のような経緯があつてのこととご了解頂きたい。おわりに佐分義雄、千葉伸夫両氏に謝意を表する次第である。

* * *

追 記

佐分真のアトリエについて

本文で「この建物は現存し…」と記述したが、これは1980年発行、日本建築学会編「日本近代建築総覧」に現存とあるのを引用したものであり、また1997年10月発行の一宮市博物館10周年記念特別展「画家佐分真の軌跡」図録に「この建物は戦災を免れ、後に伊藤廉が住まい現在も残っている」とある。その後9年が経つ。今も現存するかどうか現状調査を試みた。

2006年5月2日、現在の住居表示でいう東京都北区西ヶ原 2-12-19。営団地下鉄南北線「にしがはら駅」下車、滝野川警察署の横を斜めに入ると突き当たりが七社神社。その手前左角が目的地である。神社のすぐ隣を選んだのは佐分の父であろう。さすが尾張一宮真清田神社の神官出身らしい土地の選び方である。

表札は ITOH とあり、このアトリエ付き住宅は今も伊藤廉の遺族の方が住まわれているようである。ちなみに伊藤廉(1898～1983)は佐分と同郷、東京美術学校同期生であり同時期にパリ留学している。国画会会員、日展審査員、東京藝術大学名誉教授、愛知芸大客員教授を務めた。

建物は現存していたが、400坪という広大な敷地がどこからどこまでであったか知るよすがも無いほど土地は細分化され私道が入り組んでいてアトリエの周囲は住宅が密集し、なおかつアラカシの巨木が茂っていてわずかにバルコニーが垣間見られる。アトリエの裏に回ると北側は二階まで吹き抜けのガラス窓がチェーンで開閉出来るようになっていて採光、通風申し分ない設計となっている。設計者は二説あり一人は前述の田口戌光(「画家佐分真の軌跡」図録による)、もう一人はイギリス人(日本近代建築総覧)とある。私見では田口戌光によるものとみるのが順当と思う。

なお、このアトリエは大正10年に完成したが2年後の関東大震災でも倒壊せず、また、火災も免れたので、佐分はアトリエを震災後の数ヶ月間、罹災者のために開放したという。

(おかだ てつあき)

- 参考文献 『日本映画史』 佐藤忠男著 岩波書店
『日本映画俳優全史 男優編』 猪俣勝人、田山力也共著 教養文庫
『日本映画人名事典 男優編』 キネマ旬報社
『日本映画人名事典 女優編』 キネマ旬報社
『昭和史発掘 2』 松本清張著 文春文庫
『画家佐分真の軌跡』 一宮博物館 求龍堂
阪急東宝グループ創始者『小林一三』 宮徹著 WAVE 出版
『日本近代建築総覧』 日本建築学会編 技報堂出版
『美術家名鑑』 美術倶楽部 美術倶楽部出版局

菊本別荘のこと（鵠沼第87号追記）

— 呉昌碩の扁額について —

新 田 貴 代（鵠沼松が岡在住）

『鵠沼』第87号に私は「菊本別荘のこと」という小文を書かせて頂いたが、これに対しては多くの方からご好意に満ちたご感想を頂いた。そのことに対して、心からお礼を申し上げたい。また貴重なご意見の中には、これまで私の全く知らなかった事実のご指摘があつて、私の思い違いから前文では間違つた記述をしてしまった箇所がある。これは是非とも訂正しなければならないと思われるので、紙面をお借りしてお詫び申し上げ、誤りを訂正させて頂きたい。

先日（3月4日）「鵠沼を語る会」の有田会長のご紹介で、柏崎市在住の角田勝久氏が本多和宏氏を伴われ、有田氏と岡田氏とご一緒に私宅を訪ねて来られた。角田氏は会のホームページで呉昌碩の篆書が鵠沼の私宅にあることをご覧になり、是非見せて欲しいと、有田氏に連絡をとられたのである。その日私は折悪しく風邪で休んでいたためお目に掛かれなかったが、従兄弟の菊本昭一と夫の新田義之が、呉昌碩の扁額の懸けられている日本家屋で角田氏とお会ひした。

角田氏は書家で、また呉昌碩を含む中国近代書家の専門的な研究者である。その折のお話では、呉昌碩は一度も来日したことがないとのことであつた。従つて私が前文に書いた「彼が（鵠沼での）歓待のお礼として祖父のために画いてくれた画幅は今も菊本昭一の所にあり、扁額は、当時のままに残されている日本家屋の長押に懸けられている」という箇所は誤りであり、鵠沼を訪れた中国人は呉昌碩ではあり得ない。角田氏によれば、長押に懸けられている「三宜荘」の扁額は正真正銘呉昌碩の真筆とのことであつたが、昭一の所にある画幅は呉昌碩の息子の呉藏龕の画いたものであることが判明した。

扁額の為書には「菊本先生属篆於海上去駐随縁室乙丑年元宵安吉呉昌碩年八十有二」とあり、「於海上」は「上海にて」の意味、「去駐随縁室」は上海にあった呉昌碩のアトリエの名称だそうで、もし私達がこの為書を注意深く読み解いていれば、前文に書いたような間違いは犯さずにすんだであろうと反省している。

いずれにせよ角田氏のご指摘により、私の思い込みによる誤りの明らかになったことに對し、心より氏にお礼を申し上げるとともに、間違った記事を掲載してしまったことに對しては、「鵠沼を語る会」の有田会長および会員の方々に、お詫びを申し上げなければならない。

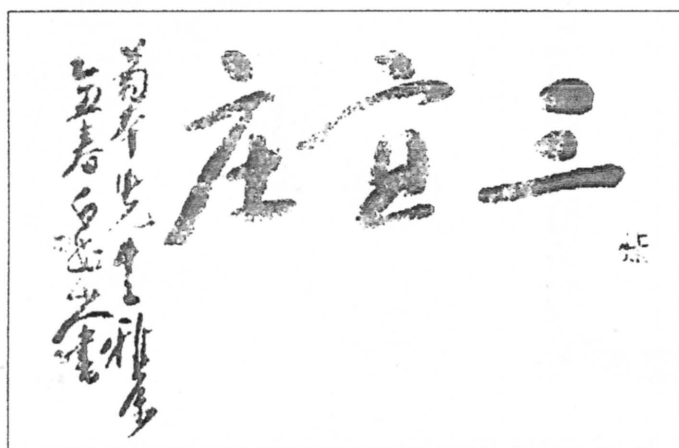
何故このような誤りが生じたのか。それを考えたとき私は、誤りを解く鍵が、為書に書かれている乙丑という年(大正14年)にあるのではないかと思った。その頃の祖父の行動を調べることが出来れば、祖父と吳昌碩との繋がりが解明でき、扁額の書かれた経緯も解るのではないかと、考えたのである。

私が拠り所としたのは、従兄弟の故菊本寿夫所蔵の『三井銀行八十年史』と、祖父の旅券であった。それにより当時三井銀行常務取締役であった祖父菊本直次郎は、ロンドン支店開設やボンベイ出張所を支店に昇格する件などで、大正13年に出国していることが判明した。なお上海支店の設置は大正6年、ニューヨークに支店が設置されたのは大正11年であることも、資料から明らかになった。

私が前文で触れた菊本昭一の所にある画幅は、籬に菊の花が配されていて、為書の日付は矢張り乙丑人日であるが、これは大正14年1月7日(但し陰曆)にあたる。それには「鞠本先生道出扈濱閑飲六三園醉歸寫此籍志雅權 乙丑人日安吉吳藏龕」とある。夫が調べてくれた所によると鞠は菊の別字、扈濱は上海県の地名であるが、上海の別名に使われているとのこと。六三園は上海にあった日本人経営の高級料亭。雅權の權は飲の別字で高雅な楽しみの意味。安吉は吳昌碩および吳藏龕の生地の名であることが解った。角田氏のお話では、吳藏龕は吳昌碩の息子で、父に劣らぬほど書画篆刻に優れていた人だったそうである。彼と祖父直次郎との個人的な関係は不明であるが、ただこの為書は「鞠本先生は途中で上海に寄られたので、私は先生と六三園で飲み比べをして酔っぱらい、帰宅してからこの写生をして、これで高雅な遊びの記念とする。大正14年1月7日。安吉生まれの吳藏龕」という意味なので、祖父が上海で吳藏龕に会っていたことは間違いないであろう。

祖父の名前の入った画幅には、他にも故菊本寿夫所蔵の楊柳に燕を画いたものがあり、これも先日角田氏に見て頂いた。それには「鞠本先生遊歐美道經滬上属畫時在甲子歲寒 白竜山人」との為書がある。白竜山人とは王一亭(1866-1938)

の号で、彼は上海実業界の実力者であり、孫文政府の農商務省長官も務めた人である。呉昌碩の弟子で、書画に優れた文人としても知られた親日家だったそうなので、祖父とは色々な意味で親交があったことであろう。欧美は欧米、滬上は上海、甲子は大正13年であるので、文意は「大正13年のまだ寒いころ、正に欧米に赴かんとする途上の菊本先生に上海で会い、先生から畫を描いてくれと頼まれた」ということであろう。



さらに私宅には「三宜庄」と書かれた白竜山人の書があり、「菊本先生雅属乙丑春 白竜山人書」とある。意味は「菊本先生からご依頼があったので、大正14年の春に白竜山人が書きました」ということであろう。

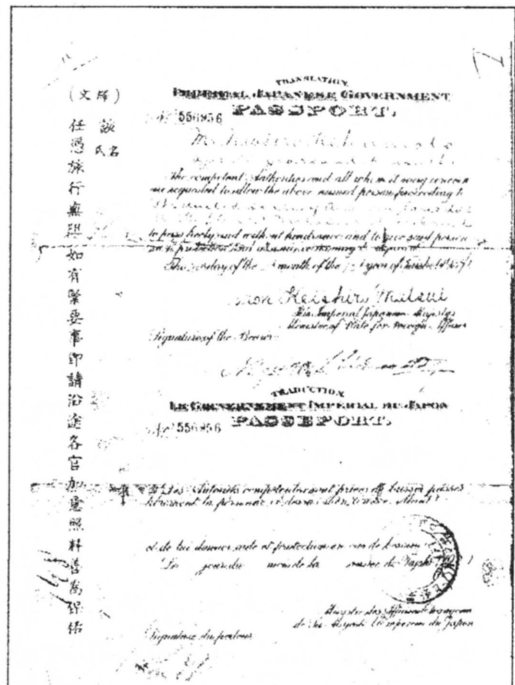
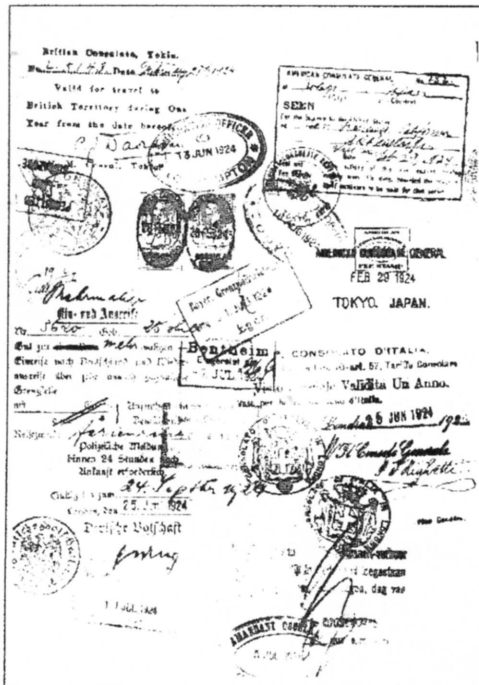
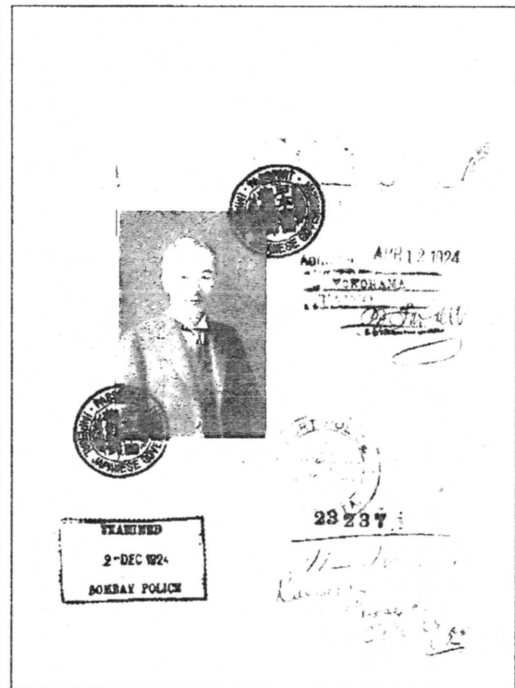
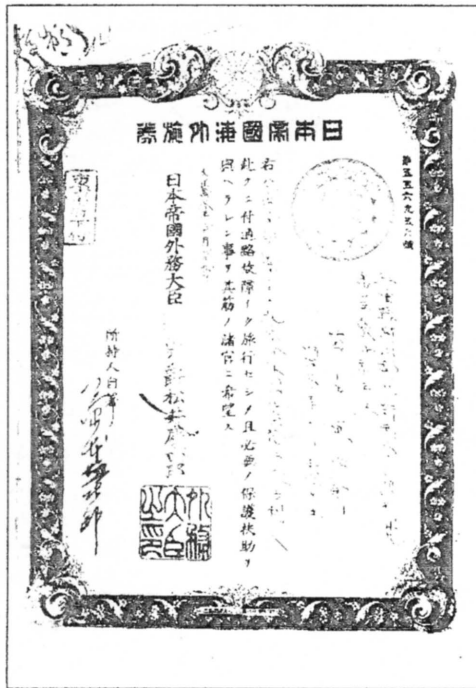
呉昌碩の篆額の為書の日付けは「乙丑元宵」大正14年1月15日(陰暦)であって、書かれたのは上海の呉昌碩のアトリエであると明記されているので、おそらく王一亭の書の方が、呉昌碩の扁額よりは後に書かれたものと推測される。

以上のことを日付けの早い順に整理し、それに祖父の行動を重ね合わせてみると、次のことが明らかになった。

- 1、大正13年の初春に、祖父菊本直次郎は渡欧の途中に上海に立ち寄り、王一亭に会い、彼に書画を注文している
- 2、翌年の大正14年1月7日(太陽暦では1月30日)菊本は再び上海に立ち寄り、呉藏龕と共に六三園で痛飲し、呉藏龕はその時の記念にと籬に菊の画幅を描いている
- 3、その一週間後の大正14年1月15日(太陽暦では2月8日)に、呉昌碩は上海のアトリエで、菊本のために「三宜庄」という篆字作品を制作した
- 4、大正14年春に、王一亭が菊本の求めに応じて「三宜庄」を書いている

祖父の海外渡航券(パスポート)を見ると、大正13年2月20日に旅券が発行され、

菊本直次郎氏の旅券(一部) 大正13年2月20日発行



28日にイギリス領事館から大英帝国領全域への、29日(その年は閏年)にアメリカ領事館からアメリカへの入国許可が下りている。

彼はアメリカに渡る前に上海を視察し、一度帰国してから4月12日に大洋丸で横浜を出航し、アメリカに向かっている。そしてニューヨークを経てイギリスに渡り、サザンプトンに着いたのは6月13日であった。それから南下してヨーロッパの各国を巡り、帰路はボンベイ、カルカッタ、シンガポールを経て、上海に立ち寄り帰国している。

彼の旅券には、シンガポールで香取丸に乗船し、1月20日(陰暦12月26日)に出航したというスタンプがあるので、陰暦の1月7日に上海で祖父と一緒に痛飲したという呉藏龕の記述は、信用できるであろう。日本に帰着したのが何日であったのかは、旅券にスタンプが無いので、はっきりとは判らない。おそらくは2月の末か、3月に入ってからのことと思われる。

以上を総合して考えると、祖父は先ず大正13年に上海で王一亭と会い、彼に呉昌碩の書画が欲しいことを話して、紹介の労をとってくれるように依頼したのではないだろうか。この時に呉昌碩に会ったかどうかは不明であるが、翌年の大正14年に再び上海を訪れた際に、祖父は息子の呉藏龕と一緒に酒を飲み、その数日後に呉昌碩は、祖父の為に篆字の扁額「三宜荘」を制作している。

これからは私の推測であるが、祖父が帰国した大正14年の春に、王一亭が鵠沼を訪れ、その際に呉昌碩の扁額と呉藏龕の画幅、ならびに王一亭自身の描いた楊柳に燕の画幅を持参したのではないと思われる。何故なら画幅二本は良く似た表装であり、菊本昭一所蔵の画幅の箱書き(呉藏龕筆)は王一亭の筆だからである。その折に彼は祖父の求めに応じて、即興で「三宜庄」の書を書き残したのではないだろうか。まだ少女だった私の母が、高名な中国人として記憶していた人は、これらの事実から王一亭だったと推測される。

このたび角田氏のご指摘により「鵠沼」87号に書いた私の文の誤りが判明し、それを訂正する作業によって、残された品々に纏わる歴史と、祖父の当時の足取りに関しても、さまざまなことを知る機会を得た。ここに前文を訂正させて頂くとともに、改めて角田氏および関係者各位に対し、心よりお礼とお詫びを申し上げます。

(にった たかよ)

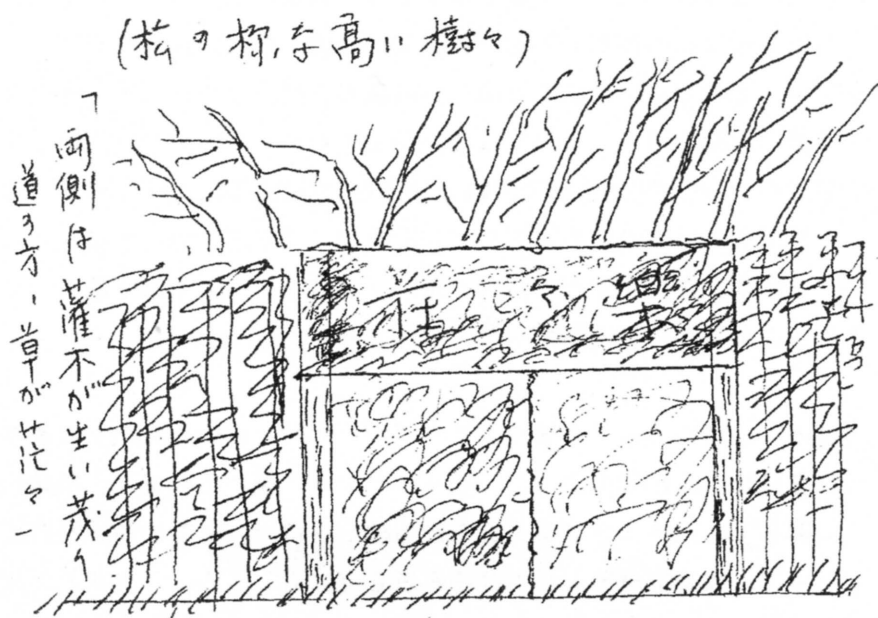
芥川の短編『悠々荘』は何処？

有田裕一・佐藤和子(会員)

芥川龍之介の最晩年の作品のうち、『鵠沼雑記』『悠々荘』『蜃気楼』『齒車』では作品のそこそこに鵠沼の風景が描かれ、生活の中の出来事などをうかがい知ることができる。

『蜃気楼』については会誌「鵠沼」83号で記したので、これを見ていただきたい。

今回とりあげる『悠々荘』は、当初その別荘がフィクションかどうかはあえて詮索していなかった。しかし他の三作品のように龍之介の心を捕らえ、精神状況、心理描写がより増幅されているといわれているだけに、この別荘に何か心を惹かれたところがあったのは間違いないであろう。「……茅葺き屋根の西洋館はひっそりと硝子窓を鎖していた。僕は日頃この家に愛着を持たずにいられなかった…。」そしてこの家を調べてみたいと思い始めたきっかけは、かなり前に龍之介の姪である葛巻左登子さん(会員)より記憶によるスケッチ①図をいただいたことから始まる。



図① 葛巻左登子氏描く楽々荘 (氏はこれが悠々荘のモデルであるといわれていた)

この図を見た時、その位置、和風の門構えなどから松が岡3-18のM氏邸であると推察した。その後左登子さんと一緒に付近を歩いたが、家並み、家数などが全く変わってしまっていたため確認はできなかった。しかし、作品と比べてその位置、庭の様子などに何か納得いかず、時が経ってしまった。その頃も道路を挟んだ反対側に「三楽荘」と呼んでいる邸宅のあったことが気になっていたのだが…。

さて、ここで作品の中の「悠々荘」の特徴をチェックしてみよう。

1. 松の中の小みちを歩いて行った。
2. 御影石の門。門にはめ込んだ「悠々荘」の標札。
3. 茅葺き屋根の西洋館。
4. 荒廃した庭、庭芝と古池。
5. 震災で落ちたと思われる壁土。
6. 母屋の後方にトタン葺きの納屋。中にストーブ、机。
7. 玄関前に階段。玄関に象牙のボタンのベル。 など。

これらの条件を満たす別荘が、松が岡3~4丁目付近にかつてあったろうか。

具体的に展開が始まったのは、他の用件で松が岡4-14のO邸を訪問した際、同家の大奥様から「越してきた頃にはお隣に茅葺きの洋館のような建物があった…」と伺った時からだった。早速先の葛巻さんのスケッチの中の門に掲げられていた扁額にある「楽々荘」と名が似ていると気にかかっていたO邸の隣の「三楽荘」の阿部さんを訪問してお話を伺った。

阿部家は昭和7年現在地に越してこられ、当時の同家の主人実蔵氏の息女実枝氏は、御影石の門はその時既に建っていて、三楽荘の標札が埋め込まれていたという。

阿部家で、かつての邸内の様子を思い出しながら描いていただいたのが図②である。

これを見ると、御影石の門もさることながら、道路から見える母屋の手前には池があり、特に茅葺きの洋館という当時あまりみられない住居が存在している。また、その裏に納屋もある。興味ある図が入手できたのであるが、この段階になっても悠々荘のモデルと楽々荘と三楽荘のつながりがもう一つ断言しにくいものがあつた。

そして今年になり、O会員から『劉生絵日記』（大正12年鶴沼時代）の中に「落々荘」の名が出てくるとの情報を得た。

絵日記の内容抜粋

大正12年1月28日

「仕事中来客、落々荘とて近処の別荘の主人、女中とものいことという人、まだ若い人だが沢田さんとも知り合いにて画がすきの由。」（二宮さんの名はこの日以降、9月16日劉生一家が名古屋へ向けて出発する日まで、日記の中には25回も書かれており、親しく付き合い始めた様子がわかる。）



麗子嬢絵画出来の図【彩】（左） 落々荘主人、二宮君来訪図（右）

落々荘主人二宮君来訪図（絵日記）

大正12年9月1日

「大震災……………12時少し前かと思う。ドドドンという下からつき上げる様な震動を感じた……………家はもうその時はひどくかしいでしまった……………津波の不安でとも角海岸から遠い所へ逃れようと……………途中石上の百姓家（鈴木米店）に呼び込まれる。」（石上で劉生一家は2日間すごすのである）

大正12年9月4日

（親切にしてくれた石上の家にそう長く居るのは気の毒なので）「二宮さんへ蓼と行く。二宮さんは温室と物置がつぶれなかったので、丸太と戸板で床をして畳を敷いて住んでいられたが、結局物置の方を片付け床をつくり畳を敷いて拝借……………壁など落ちていて……………」

9月6日の日記にも、女中ともの家（二宮さんの親類）へ食料をとりに行く……とあり、落々荘の主人は、ここでも二宮さんとはつきりわかる。「落々荘」は劉生の住んでいた松本陽松園から近く、親しかったことがわかる。

また、二宮さんの家には温室と納屋があったようで、震災3年後に書かれた『悠々荘』では、納屋は温室代わりにも使われていたことがうかがわれる。園芸用の腐蝕土が庭芝の上に落ちていたり、石膏の女人像（頭に蘭などを植える）があったり、と龍之介の見た納屋は二宮さんの納屋と一致するように思われる。

さらに、旧土地台帳により落々荘の所有関係を検証してみよう。

大正7年11月に横浜市中村町字平楽の二宮氏が、大給近孝氏から購入し、昭和7年に阿部氏が二宮氏から購入していることがわかった。このため大震災の大正12年及び、龍之介の作品の大正15年当時は二宮氏が所有していたことになる。震災の後にはあまり修復されず、母屋の壁や物置はそのままだったと考えられる。また、二宮氏の住所に平楽町と再び「楽」の字が出てくるのも興味あるところである。

また、龍之介の書簡集のうち、大正15年8月9日（『悠々荘』を著した2か月半前）佐佐木茂索宛の手紙で

《国木田君の家へは早速出かけた。月半ばに転居するよし、少し仮住いには上等すぎるが借りようかと思ひをり。煙突みたいな赤塗りの洋館、前には岸田劉生がいたよし……。》

これを読むと、龍之介も3年ほど前まで劉生の住んでいた家（劉生の後、国木田虎男＝詩人。独歩の長男＝が住んでいた）を仮住まいにと思って見に行ったようである。この家は先の二宮さんの家（落々荘）も近く（略図参照）、この辺りを散歩する龍之介を見かけたという人たちの話も聞いている。

このように少なくとも落々荘（楽々荘）が三楽荘（略図の⑤）であるということは決定づけられるのであるが、「悠々荘」が「三楽荘」であったという推測にはかなり近づいているとしても、今

今後この『悠々荘』のモデルがはたして何処であるのかは、諸兄の研究を待つところである。

（ありた ひろかず）（さとう かずこ）



龍之介・劉生宅・悠々荘略図

しょう 「正ちゃん」の正体判明

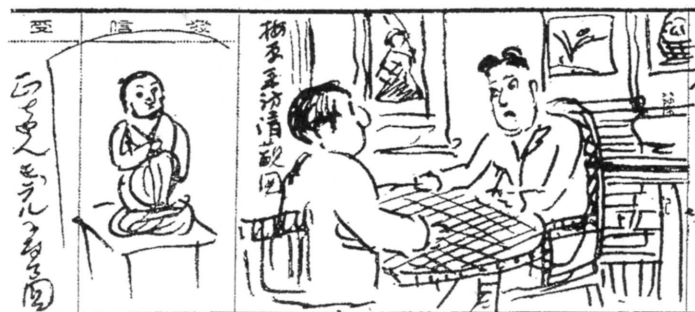
会員 岡田 哲明

岸田劉生は鵠沼に来る前の東京時代、誰彼かまわずモデルにして多くの肖像画を描いて劉生の首狩りと友人たちにいられていた。鵠沼へ来てからもその傾向は見られ、劉生は家族、友人、書生、など多くの人物画を制作した。なかでも二人の少女、愛嬢麗子と村娘の葉山マツをモデルにした作品は数も多く、よく人の知るところであるが、じつは二人の少年も描いているのである。一人は甥の田中^{しげる}信之、妻^{しげる}秦の次姉の息子で八軒別荘に住んでいた。八軒別荘は当時、劉生の弟子椿貞雄も住んでいた所である。劉生は信之を「坊ちん」と呼んで可愛がりしばしばモデルにしたし、日記にもスケッチが頻繁に描かれている。油彩や水彩の信之像は数点残っている。もう一人が「正ちゃん」である。

大正 12 年の劉生日記に次の記述がある。

三月二十九日（木）曇、暖

十時離床。正ちゃんモデルの為め来てゐる。昼頃から、テムペラにて八号アブソルバント画布にかきはじめる。簡単なものを造ってみやうと思つて也。少々寝不足にて仕事にみが入らず、しかし三時頃迄仕事する。略下ぬりは出来る。今日は梅原が来る事になってゐる。仕事の後、横堀をたづねたら留守。帰宅して間もなく梅原やつて来る。屏風や、支那の絵をみせる。二階の壁に鳩葵八大山人、野菜、明畫花鳥牡丹、水仙、花籠、黄鳥図暫図、玉堂、鹿図等かけてみせる。横堀来訪。夜食をともにし、八時前梅原帰る。（以下略）



「正ちゃんモデルになる図」

「梅原来訪清観図」

三月三十日（金）晴曇後雨

九時頃離床。昨夜来かけはなしにしておいた鳩葵八大人野菜図等いたむといけないので今朝またしまふ。朝食後、春らしくなった門外を一寸歩いてみたりする。大分あたたかいが今日は風がある。昨日の日記などつける。正ちゃんはもう来てゐる。麗子と草をとって来て玄關中草だらけにして遊んでゐる。十一時頃から正ちゃんの肖像にかかると。テムペラの筆と油の筆を一緒にして小林叱られる。今日も頭があまりよくなくて仕事にあまり気がのらない。それにこの正ちゃんの肖像はテンペラでやった故もあるうか、又、その畫材が気にしっくり合はぬ故か、あまり気がすすまぬ。ともかくかいてしまはうとは思ふが。二時頃その仕事やめ…（以下略）

この後、日記の中に正ちゃんは二度と登場しない。したがって正ちゃん像はこの1枚しか描かれていないのである。これだけの情報では正ちゃんのフルネームはおろか、どこの誰やら、誰の子供かも分からない。

岐阜市長良富士山 3535 に三甲美術館という美術館がある。

ここの所蔵品に「村娘於松の弟像」があり、キャンバスの裏には縦書きで

劉生真筆（鴫沼時代）椿貞雄

劉生筆 村娘於松之弟像 岸田麗子

と書かれているという。



「村娘於松の弟像」

岸田劉生 (1891~1929)

油彩 45.5 × 37.9 cm

劉生の日記と照合すると8号のキャンバスの大きさは 45.5 × 37.9 cm でぴったり合致する。

ポーズも日記のスケッチと同一である。一緒に遊んだ麗子が於松の弟だと裏書しているから「正ちゃん」が於松の弟であることはこれで証明された。

ただ、テンペラを油彩としている点と、スケッチでは右手に大きな瓶のような物の首を掴んでいるが本画にはない。この違いについては今、美術館に照会中である。なお三甲美術館は搬送用パレットやビール瓶酒瓶のプラスチックケースなどのメーカー三甲株式会社が所有運営する美術館である。

2006 年 5 月ころ、横浜市神奈川区にお住まいの葉山勝則さんという方が有田会長を訪ねて来られた。葉山さんは「村娘於松」のモデル川戸マツさんの甥（長兄喜知郎の四男）に当たる方でご先祖のルーツを探るべく戸籍謄本のコピーを持参され、そこに記載されている本籍地、鶴沼下岡六六四四番地は何処かを尋ねて来られたのであった。その謄本により葉山家の家族構成が明確になった。9 月上旬、勝則氏に再びお目に掛かった際ご了解を得たので、ここに写させていただく。

戸主 葉山 ^{はやま} 虎吉 ^{とらきち} (生年不詳 大正 11 年 8 月 4 日没)

妻 サダ (明治 9 年 12 月 12 日生) 明治 26 年 1 月 18 日結婚

長男 ^{きちろう} 喜知郎 (明治 28 年 8 月 13 日生)

長女 ヒヨ (生年月日不詳)

次男 ^{さんのすけ} 三之助 (明治 33 年 12 月 4 日生)

三男 — 早世

四男 ^{くにぞう} 国蔵 (明治 38 年 9 月 29 日生)

五男 ^{しかぞう} 鹿蔵 (明治 41 年 12 月 18 日生)

次女 マツ (明治 44 年 8 月 24 日生) 川戸家に嫁す

六男 ^{しょうきち} 正吉 (大正 3 年 2 月 23 日生)

七男 ^{はちろう} 八郎 早世

すなわち「正ちゃん」の正体は葉山虎吉六男でマツの弟、正吉であることがこれで明らかになったのである。劉生のモデルを務めた時は 9 歳 1 ヶ月であったことも。

註：日記中、梅原は梅原龍三郎、横堀は草土舎同人の横堀角次郎（中屋に滞在中）、小林は書生の小林欽夫のこと。

引用文献：『岸田劉生全集 第八巻』1979 年 9 月 10 日発行 岩波書店刊

(おかだ てつあき)

鵠の字体について

杉本辰夫（会員）

鵠の字は以前から2種類の字形が存在しており鵠沼を語る会でも、どちらが正しいのか、はっきりした結論は得られていないようなので、調べてみました。

2種類の字体は  (字形1) と  (字形2) で
偏へんの上の部分が  か  かの違いです。

とりあえず戦前では、どちらが使われていたのか自宅の書籍で調べてみました。

(1) 簡野道明著 漢和辞典「字源」(大正12年印刷・発行)

字形1が使われています。

(2) 徳富健次郎(蘆花)著「思出の記」(明治34年初版、大正9年版)

鵠沼が十数カ所出てきますが、すべて字形2になっています。

(3) 松岡静雄著「有由縁歌と防人歌」(昭和10年印刷・発行)

序の末尾に 於相州鵠沼神楽舎 松岡静雄とあり、ここの鵠は字形1ですが

奥付の著者住所 神奈川縣藤澤町鵠沼堀川 の鵠は字形2となっています。

三冊だけの例ですが戦前では2種類の字形は混用されていたと思われます。

戦後になって政府は漢字の標準化を進め、文部省所管の国語審議会(現在は文化庁の文化審議会国語部会)の答申によって昭和56年10月常用漢字表1945字が告示されています。

別に法務省により戸籍に子の名として記載できる漢字のうち、常用漢字に含まれないものが人名用漢字として昭和26年92字制定され、その後順次追加されて現在983字指定されています。

しかし、両者とも「鵠」の字は収録されていません。

平成12年12月に上記漢字以外の漢字(表外漢字)のうち、使用頻度の高い1,022字については「印刷標準字体」として表外漢字字体表が公表されました。

この字体表で「鵠」は、字形1の形で収録されています。

(注) この字形は康熙字典こうき〔中国、清時代に編纂された漢字の辞典で1716年(康熙55年)に完成、47,035字を集録している〕に基づいています。

これとは別に通産省所管の日本工業標準調査会ではコンピュータで漢字を処理するために個々の漢字にコード番号をつけて平成12年1月に日本工業規格(J I

S規格)として漢字 10,040 字の J I S 漢字コード番号と字形を公表しました。

このなかで「鵠」は J I S 漢字コード番号 3974 で 字の形は (字形 2) が例示されています。

現在パソコンなどで使用されている「鵠」の字形がこの形になっているのはこの例示字形に従ったためです。

このため、国語審議会 (文部科学省) と J I S 規格 (経済産業省) が異なった字形を規定することになったのですが、その後 J I S の例示字形を国語審議会の字体に合わせるため平成16年 2 月 J I S が改正され国語審議会の標準字体と異なる 168 字の字形が変更されました。

改正後 字形	改正前 字形
鵠	鵠

この J I S の改正にあたって経済産業省は「一般にパソコンなどに搭載される字形は J I S の例示字形を基に作られることが多い。したがって、今回の改正によってパソコンなどに搭載される字形が、徐々に印刷標準字体 (字形 1) に変更されることが期待される。」としています。

この結果「鵠」の標準字体は今後 **鵠** (字形 1) に統一されることになりました。

一方国語審議会では字形 1 と字形 2 の違いは活字設計上の表現の差、すなわちデザイン差で字体の違いではないとしています。

「鵠」と同じデザイン差 (交わるか、交わらないかの違い) の例を示します。

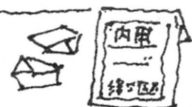
訛 訛 → 箒 箒 珊 珊 恢 恢 → 鵠 鵠

(参考)

漢字の形には次のような違いがあります。

字体の違い: 沢 (新字体) 澤 (旧字体)
書体の違い: 鵠 (明朝) 鵠 (ゴシック)
字形の違い: 鵠 (交わる) 鵠 (交わらない)

(すぎもと たつお)



後藤医院（鵠沼分院）



会員 岡田哲明 編

前 説

鵠沼橋通りの後藤医院の建物は一度調査をしなければとの声が前々から会員の間で上がっておりました。それで2002年10月26日に所有者の方に群馬県から来ていただき、後藤家の事、本院との関係など、お話を伺うと共に、建物の内外部を見学させて頂いたことがありました。鵠沼の緑と文化財を守る会の杉山さん、当会会員で藤沢市議の河野さん、当会の伊藤会長、鈴木さんと私（岡田）でした。

その時、私が強く感じたのはこの建物の貴重性はいずれ専門家による学術的調査が不可欠であるということです。一級建築士である私には、それだけの価値のある建物であることが一見して読み取れたのです。

その後、敷地の南側を分割して共同住宅が建てられ、全景を一望する事が出来なくなりました。今年の春、建物を残す事を条件に売却したいとの話がもち上がり「鵠沼の緑と景観を守る会」が中心となって専門家による学術的建物調査が行われ、この度、立派なレポートにまとめられました。同会のご好意によりここに転載の許可を頂きましたのでご紹介致します。（誌面の都合上、図面・写真の一部および野帳を割愛させていただきました）

* * *

旧後藤医院建物調査報告書

はじめに

平成18年、春、藤沢市橋通郵便局近くにある旧後藤医院所有者の方から、敷地内の建物を残すことを条件に売却したいとの話がありました。私達「鵠沼の緑と景観を守る会」は、かねてよりこの建物の価値を高く評価し、各方面に紹介しておりました経緯から、この売却のお手伝いをする事になりました。元々この建物は、昭和8年築の洋館で、鵠沼地区内でも数少ない景観上重要な建造物です。

そこで、専門家による建物調査をすることに致しました。調査は平面・立面の実測と建物の来歴や特徴を調べる事に重点を置きました。

今回出来上がった旧後藤医院建物調査報告書は、建物所見、図面（配置平面図・立面図）、写真、調査時野帳からなるものであります。

調査日時

平成 18 年 4 月 1 日

調査参加団体

（社）神奈川県建築士会スクランブル調査隊

よこはま洋館付き住宅を考える会

邸園文化調査団

（協）藤沢市設計監理協会

（社）日本建築家協会

鵠沼の緑と景観を守る会

* * *

2006 年 4 月 24 日

旧後藤胃腸内科医院鵠沼分院についての所見

関東学院大学人間環境学部

人間環境デザイン学科

水沼淑子

建築概要

所在地 藤沢市鵠沼橋 1 丁目 14 番 7 号

構造 木造平屋建 入母屋造 銅板瓦棒葺 外壁杉板洋風下見板張り（イギリス下見）

規模 168.8 m² (51 坪)

竣工 昭和 8 年（後藤家遺族からの聞き取りによる）

設計者 不詳

施工者 不詳

1. 旧後藤医院の沿革

旧後藤胃腸内科医院鵠沼分院は藤沢市鵠沼橋 1 丁目に位置し、東京小石川鵜籠町（通称大和郷）の後藤胃腸内科医院の鵠沼分院として昭和 8 年に開院したという。大和郷の後藤胃腸内科医院は、群馬県吾妻郡高山村出身の医師後藤瞭平氏（明治元年～昭和 36 年）によって大和郷内の鵜籠町 113 番地に開業された。後藤家長男秀兵氏（明治 21 年～昭和 46 年）は東京帝国大学医学部を卒業後同医院に医師として従事したが、昭和 8 年、鵠沼分院が開院するのに伴い、秀兵氏が分院を担当することになったものと考えられる。秀兵氏は昭和 8 年にはすでに 40 代半ばであったことから、鵠沼分院の設立は秀兵氏が独立する契機だったのだろう。その後、鵠沼分院は戦後まで存続したが秀兵氏が高齢になったのに伴い閉院された。御遺族によれば、秀兵氏は終生単身で医院内に居住していたという。後藤胃腸内科医院鵠沼分院は医院を兼ねた併用住宅とすることができる。

鵠沼はすでに明治期から別荘地として開発された地域だが、震災後は旧別荘地周辺を中心に住宅地化が進行した。とりわけ交通の便の良い藤沢駅近辺では複数の住宅地開発が行われており、東京近郊の優良な住宅地として注目を集めていた。旧後藤胃腸内科医院鵠沼分院は橋通りに立地する。橋通りは震災後の鵠沼の住宅地開発を主導した高瀬彌一が関東大震災後に開設した道路であり、藤沢駅から南下し高瀬通りに至る道路だった。震災後における鵠沼の住宅地開発は、松が岡など明治期に開発された別荘地の周辺に展開し、特に藤沢駅や石上駅近辺の交通の便の良い一帯には「高瀬通り住宅地」「松島苑住宅地」などの住宅地開発が行われていたことが判明している（加藤徳右衛門『現在の藤沢』昭和 8 年）。

後藤医院の鵠沼分院設置はこうした住宅地開発に伴うものと考えられ、大和郷に在住していた住民が鵠沼に転出したことなどが契機となった可能性も考えられるだろう。

2. 建築の特徴

1) 平面の特徴

建物は木造平屋建、入母屋造・銅板瓦棒葺きとし、外壁は杉板洋風下見板張り（イギリス下見）の大壁造りである。内壁は基本的に真壁造りで漆喰仕上げとするが、床は後に畳敷きに改造された部分もあるが当初はすべて板床であったと考えられ、洋風の起居様式を前提とした仕上げであった。

平面は短辺 8.3 メートル、長辺 20 メートルの東西に長い矩形で、東側に医院としての機能を置く。また、東西方向中央部に動線として中廊下が設けられ、その両側に居室が 3 室ずつ規則正しく配置されている。玄関は東南角に設けられる。玄関を入ると待合室があり、待合室に面して診察室、事務室、薬局、患者用トイレなどが置かれる。また、台所脇には内玄関が置かれるが位置、規模ともに勝手口的な位置づけと考えられる。

同時期の医院併用住宅の平面を参照すると、住宅用の本格的な玄関を別に置くものが多く散見される。旧後藤医院鵠沼分院の場合、秀兵氏が単身であったことなどから住宅用の本格的な玄関を設ける必要性がなく玄関が一箇所になったのだろう。また、大正時代の中頃から中廊下を持つ住宅平面（中廊下式住宅平面）が都市中流階級の住宅に多く採り入れられるようになったことは良く知られている。中廊下式住宅平面の場合には主要な居室は廊下の南側に配置し、サービス部分を北側に配置するのが一般的である。したがって、旧後藤医院鵠沼分院の平面は中廊下を平面の中心に持つものの、いわゆる都市中流住宅に見られる中廊下式住宅平面ではない。一方、住宅以外の建築物において動線として中廊下をもつ平面は学校・病院などをはじめしばしば散見される平面である。すなわち、後藤医院の平面の考え方は、住宅から発想された平面と言うよりは医院として発想された平面に居住の機能を当てはめたものと言えるだろう。

極めて単純で整然とした平面構成は、戦前期の医院建築の建築計画の考え方を良く残すものであり、貴重な遺構といえる。

2) 意匠上の特徴

この建物の意匠上の特色は外壁を素地仕上げの洋風下見板張りとしながらも、屋根は入母屋造りの銅板葺きとする複雑な構成にある。下見板貼りのみならずこの建物の外観上の洋風要素として出窓状の上下窓を挙げることができる。一方、玄関底部分の意匠を始め、銅板葺きの入母屋屋根に代表される表現は和風の表現である。旧後藤医院の外観は洋風の意匠と和風の意匠が破綻なく併存しており、この点に大きな特徴を認めることができる。

また、内部意匠においては内壁は漆喰仕上げの真壁とするものの板床で巾木をつけ、天井は根太天井とするなど、外部意匠と同様、真壁という和風の意匠と、起居様式として選択した床座に相応する洋風の意匠が混在している。

内部外部を併せて考えるならば、この建物においては外部意匠内部意匠ともに、

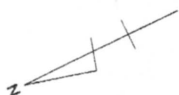
いわゆる和風洋風といった形式的な選択はされず、施主の好みや病院建築としての必然性から来る要求に従い、部分ごとに最も望ましい意匠を選択し、その結果成立した意匠といえる。しかしながら全体として和風意匠と洋風意匠が破綻がなくまとめられており質の高い建築となっている。こうした構成は、洋風意匠にも和風意匠にも通じた建築家の関与を想起させるものといえる。現時点では設計者は不詳であるものの、力量のある建築家が関わった可能性を示唆する意匠といえる。

3) 建築技術上の特徴

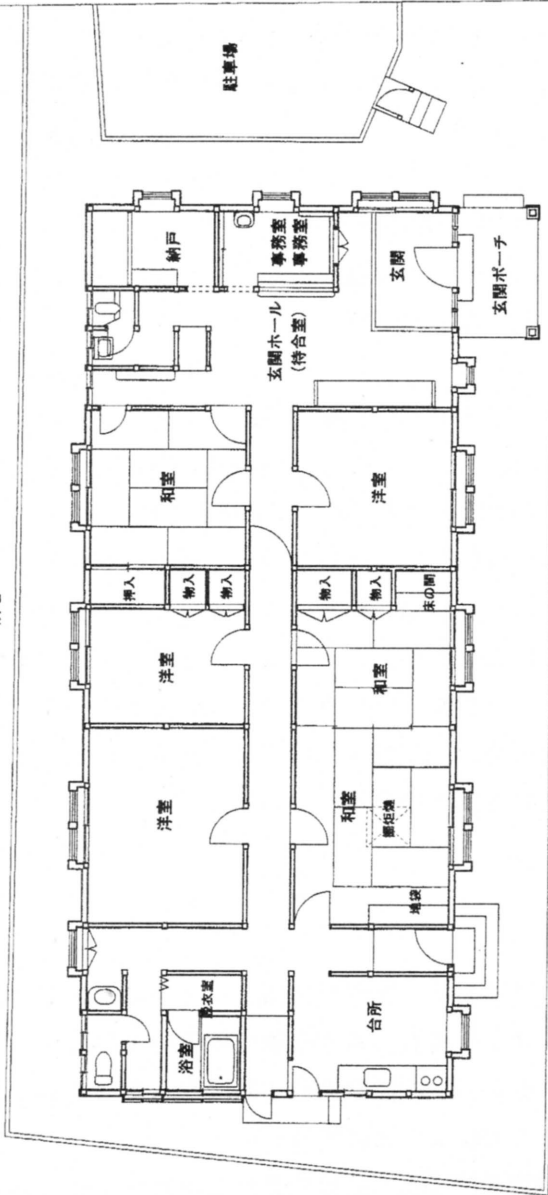
旧後藤医院鵜沼分院の建築技術上の大きな特徴は、環境工学的な配慮である。とりわけ開口部の工夫は特筆すべきものである。まず、ほとんどすべての開口部に2重窓が採用されている。すなわち、開口部は出窓状になっており、室内側には引き違いのガラス窓を設け、外側に上下窓が設置されている。上下窓の内側にはロールブラインドが設置されさらにその内側にカーテンが引かれる。開口部下部巾木部分には換気用の小窓が設置される。すなわち、引違窓+カーテン・ブラインド+上下窓+巾木換気口からなる構造であり、換気や温度調整への配慮がなされている点は特筆される。さらに、換気用の越屋根が中廊下上部に3箇所設置され、これも同様の効果をもたらすものである。これら、環境工学的な工夫が随所に見られる点は旧後藤医院の大きな特色であり、昭和初期に藤井厚二や山田醇などが提唱した住宅への環境工学的設計方法導入に通ずるものである。加えれば、2重窓は環境工学的な役割以外に真壁の室内空間と大壁の外壁を両立させることにも貢献しており、機能と意匠両面で意味のある形式といえる。

次ぎに構造上の特色について述べる。合理的な平面計画の採用は構造上も大きな意味を持つものである。すなわち、単純な矩形平面であることによって小屋組も極めて整然とした構成としている。小屋組は和小屋だが和小屋にありがちな複雑な小屋組とは無縁であり、東西方向に一間間隔で同一断面の部材による小屋組が整然と配置されている。関東大震災後には金物の多様が一般的だがこの住宅の場合金物の使用は確認できず、伝統的な継ぎ手仕口が用いられている。

また、床高が高いのもこの建物の特徴である。布基礎には大谷石を用い、独立基礎も大谷石である。基礎は直接砂地の上に置かれている。床下は高さがあることも相俟って通風良く極めて良く乾燥しており建設後の経年による虫害や腐蝕などはほとんど確認できず、保存状態は極めて良好である。



敷地



駐車場

前面道路

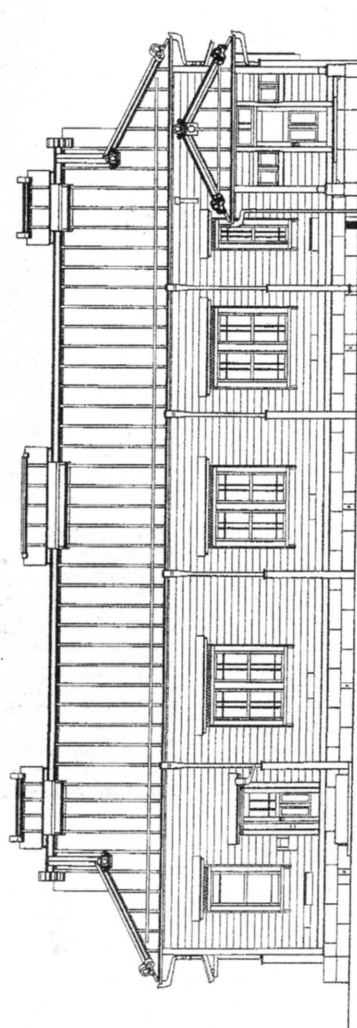
敷地

3.810	4.550	3.640	3.640	2.730	1.820
20.190					

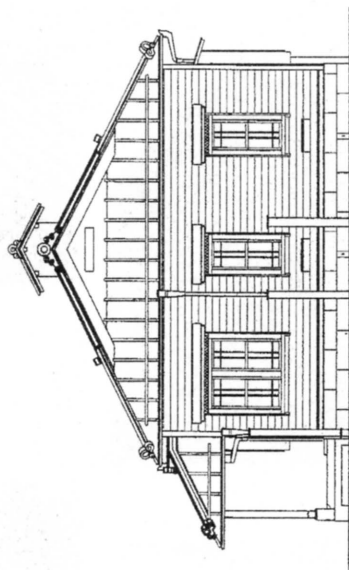
8.360	3.640	1.080	3.640
-------	-------	-------	-------

配置平面図





南立面图



東立面图

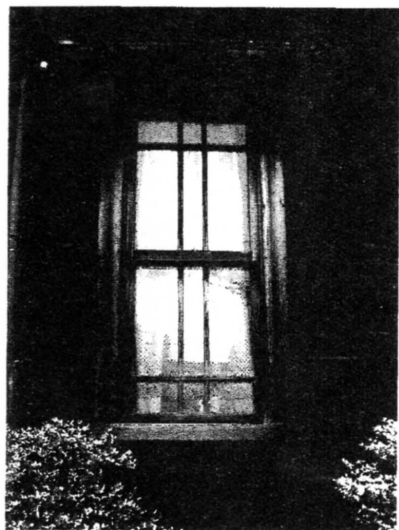
立面图

0 1 5m



屋 根

入母屋銅版瓦棒葺き 瓦棒甲丸型
換気越屋根付
本棟・下り棟共鬼瓦銅板製
雪止めは、瓦棒とほぼ同サイズ



外 壁

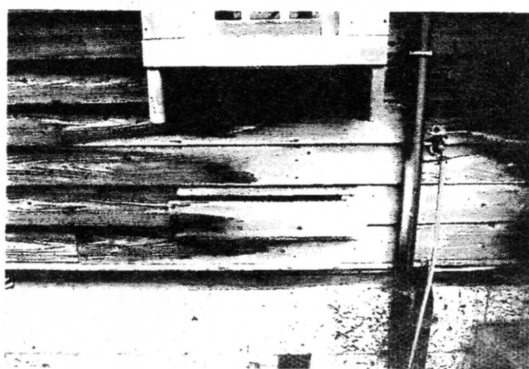
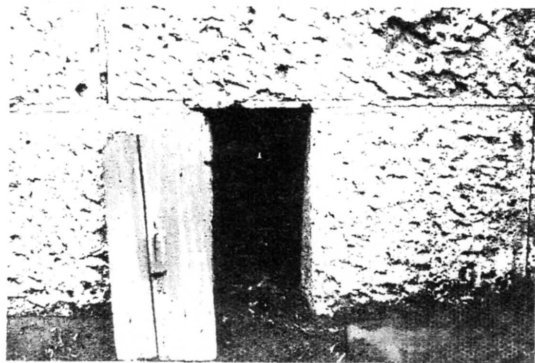
杉長押挽き (なげしびき)
南京下見板
165×15 素地仕上げ

開口部

上げ下げ窓
←単窓 2連窓→



窓下換気口
外部↓



基 礎 大谷石横3段重ね (組積式布基礎) 斫り (はつり) 仕上げ
鑄鉄製換気口 冬季用木製蓋付

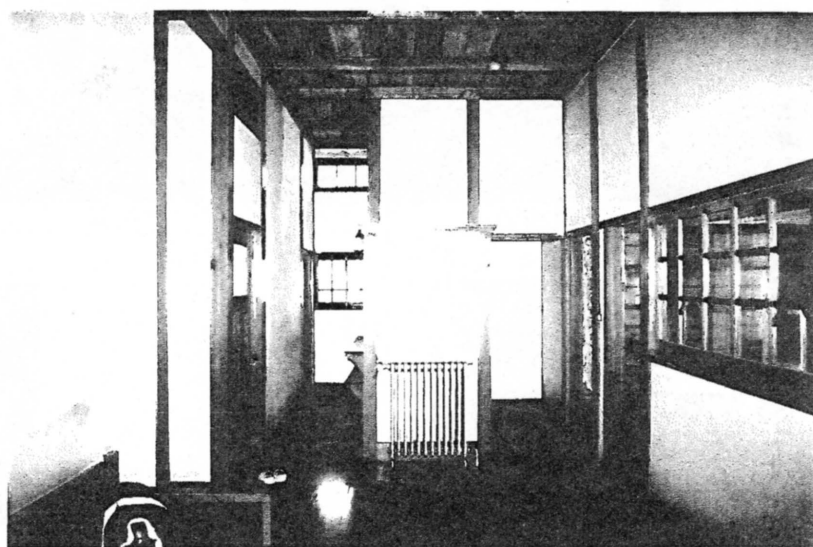


待合室玄関



廊 下

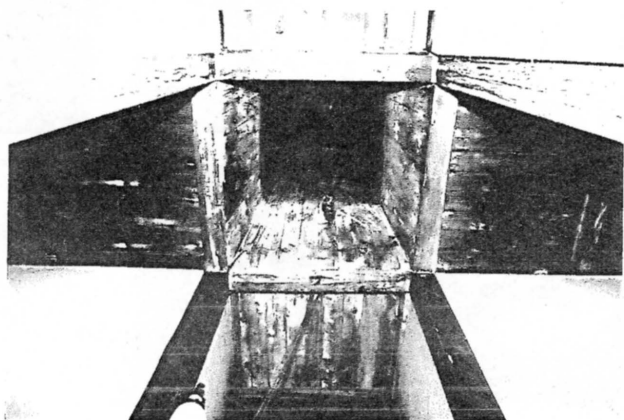
天井
根太天井造り
平面剛性にも効き
耐震性にも貢献
天井高さ約 3.1m



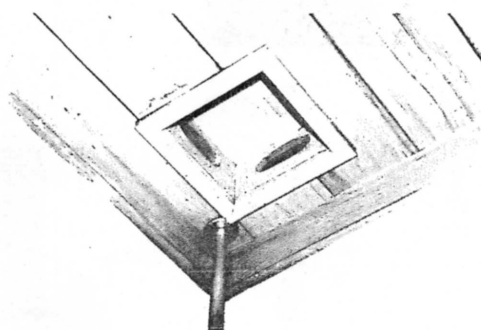
待合室

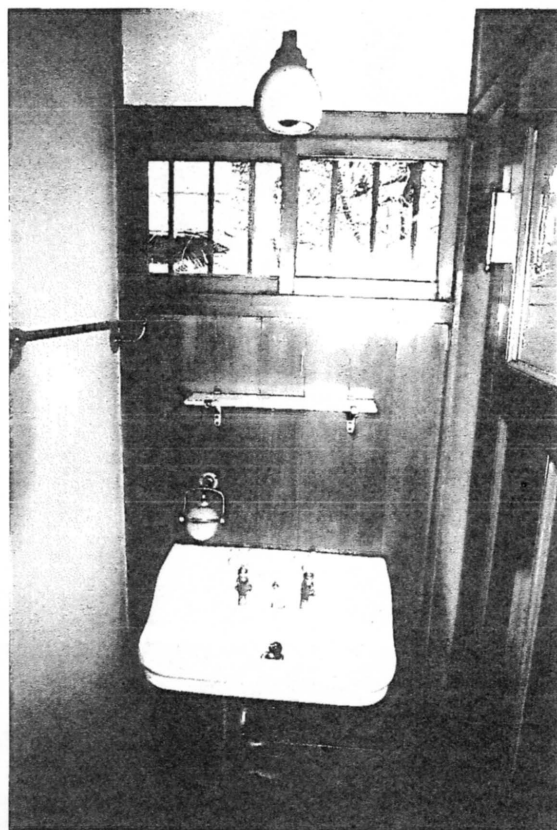
越屋根換気棟

玄関と廊下計 3ヶ所
内部から紐で換気棟の開口を開閉

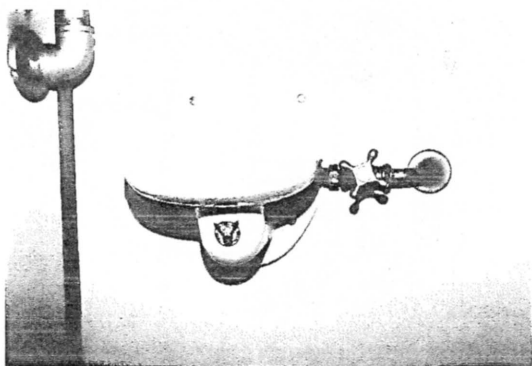


天井 4 隅に天井裏換気口

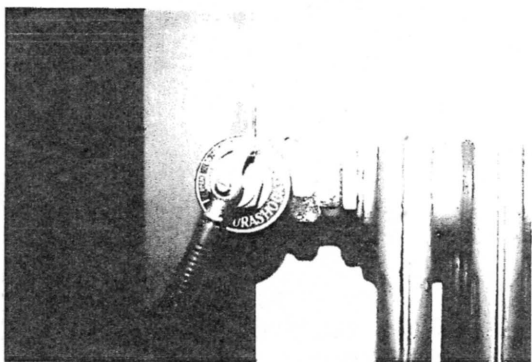




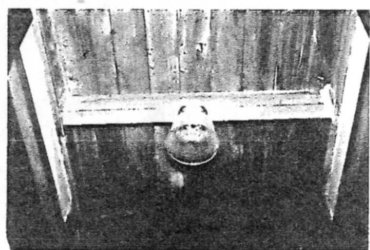
洗面室



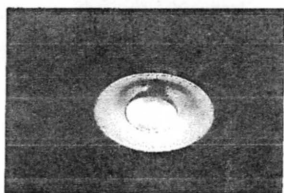
手洗い入口に珍しい小型水洗式痰吐器



温水ラジエーターが現在も何台か残る

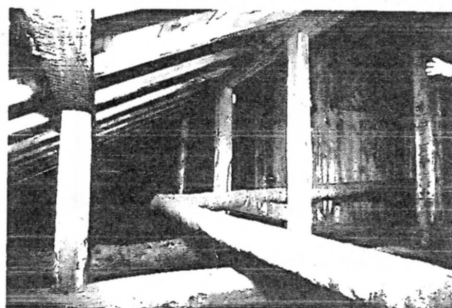


小照明器具のいろいろ



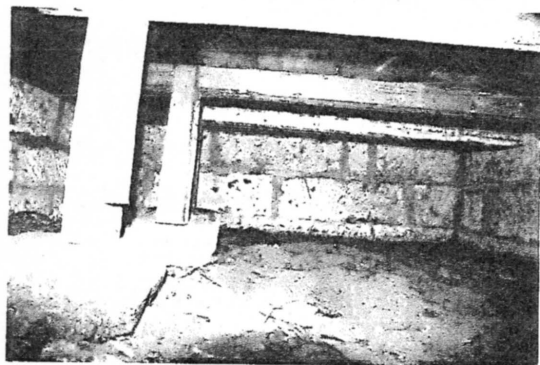
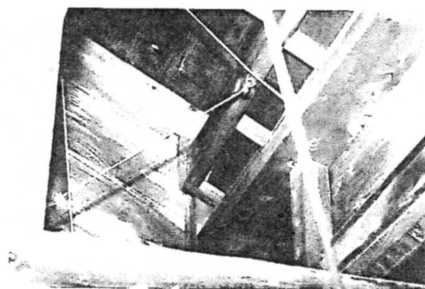
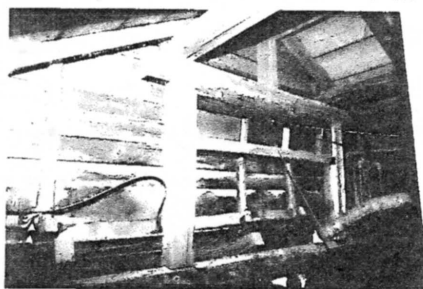
小屋裏

雲筋違（すじかい）や小屋筋違を設けず整然とさせ、根太天井造りとして天井上が歩ける廊下の間仕切り上に中引き丸太梁、軒側から投げ掛け丸太梁を渡した小屋組を形成
換気に対する配慮のため、大きな空間を造っている



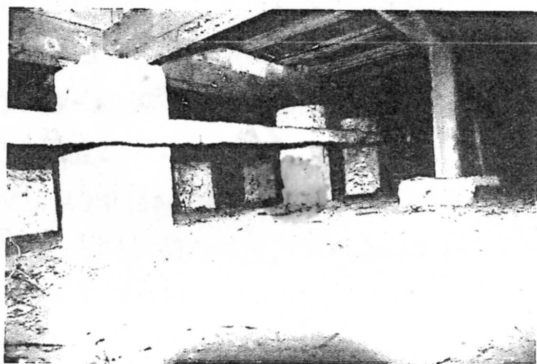
垂木（60×45） 野地板（180×12）上に杉皮葺き 杉皮葺き上に銅板屋根架け
羽子板、ボルト、鋸（かすがい）等補強金物一切見当たらず
換気用吹抜け上に越屋根

越屋根換気棟は玄関と廊下計3ヶ所に設け、内部から紐で換気棟の開閉をする



床下

腰を屈めれば行き来できるほど高く、根搦（ねがらみ）貫は無く高床式建物を思わせる
砂地に大谷石を縦に立てたろうそく基礎
基礎上に間仕切り土台が載る
床束石は大き目のコンクリート片



鵠沼の西縁を歩く ～引地川縁道を河口から引地橋まで～

案内: 渡部 瞭 (会員)

6月例会日の6月13日(火)、薄曇り、暑からず寒からずの好天に恵まれて2006年度史跡見学が行われた。以下、当日配られたミニ解説のプリント内容に若干の手を加えて報告する。丸数字は主要見学箇所である。

① 鵠沼公民館 例会の中で多少の事前説明を行ってから出発。

裏門から右折し、鵠沼最古の旅館「鵠沼館」の跡地に建てられた「オーシャン
プロムナード(養護老人ホーム)」の脇を左折、肥上道こえあげみち(かつて辻堂村の農業組合が片瀬・江の島の旅館街の屎尿汲み取り権を獲得し、下肥を運ぶために利用したことからこのように呼ばれるようになったと伝える。江戸時代の引地川本流跡であり、堀川田の農業排水路=古川が脇を流れていたが、1964(昭和39)に暗渠化し、道路が拡幅されたため高層建築が可能になった)から渚橋をくぐり片帆橋を渡る。

② 聶耳記念広場 鵠沼海岸2-18

ニエアル
聶耳(1912/02/15昆明～1935/07/17神奈川)は中国の若手作曲家。代表作の映画主題歌〈義勇軍進行曲〉は後に中華人民共和国の国歌となった。

1935年、当局の弾圧を逃れ日本に亡命した彼は、1935年7月17日、鵠沼海岸で遊泳中に水死した。中華人民共和国建国時の1949年に藤沢市民有志により聶耳を記念する運動が起こり、1954年に山口文象(建築家)制作の耳の字をかたどった記念碑が建てられ、11月1日に中国の紅十字会長、李徳全女史を迎え、除幕式が行われた。これが藤沢市と昆明市が姉妹都市関係を結ぶきっかけとなった。

1958年、狩野川台風の高波により破壊されたが、1965年に記念碑保存会により、記念碑の再建運動が始まり、同年9月に再建された。

1986年、聶耳没後50周年記念事業として、藤沢市民と関係者の浄財で聶耳のレリーフ(菅沼五郎作)を建立するとともに、神奈川県や藤沢市の協力を得て、記念碑とその周辺を整備し、現在の聶耳記念広場となった。

聶耳広場には記念碑以外にもいくつもの有名人の筆跡がある。

※鵠沼橋脇に1969(昭和44)年6月に完成した県下初のスロープ式横断歩道橋で、国道134号(湘南遊歩道路)を渡る。

③ (引地川改修)紀功碑 鵠沼海岸2-17地先

昭和7年から9年(1932~34年)にかけて、神奈川県と藤沢町の手により行われた下流部の改修工事のことが、当時の町長一木與十郎の書で刻まれている。

※この碑は一時引地川に転落し、行方不明になっていたが、鵠沼を語る会元会長塩澤務氏が発見、引き上げ、再建したという。

④ (鵠沼耕地整理事業完成)記念碑 鵠沼海岸4-8地先

1986(昭和61)年の建立。この耕地整理事業は、県による河川改修事業実施の前年、昭和6年に開始されたが、途中第二次大戦や、鵠沼海岸地区の宅地化の進展のため、なかなかまとまらず、やっと昭和末期の61年になって事業の完成を見た。

⑤ 堀川(引地川)改修堤防築造碑 鵠沼海岸4-21-8地先

1786(天明6)年及び1803(享和3)年の2回にわたり引地川が氾濫し、この付近に大きな被害をもたらしたこと、堀川の浅場家が、私財を投げうって堤防を改修したことなどが刻まれている。この碑は遠く江戸時代の1808(文化5)年、浅場太郎左衛門により建立されたものを、引地川改修時の1932(昭和7)年、子孫の浅場虎吉が再建したもの。

※ここで浅場会員が碑面の文章をプリントしたものを用意され、克明な解説を加えてくださった。

⑥ 大平橋の由来碑 引地川左岸大平橋橋詰

鵠沼以外の地点、辻堂太平台にある。地名は太平台だが橋の名は大平橋。テンたいへいだいのあるなしで違う。橋の名の由来がわかりやすく書かれている。

⑦ 鵠沼堰跡 本鵠沼4-10地先

昭和初期の引地川改修の際に建造された農業用水取り入れ水門。これにより「堀川田」とも「八部はっぺの田圃」とも呼ばれた水田地帯が整備された。

水田の消滅とともに御用済みとなり、取り壊された。

かつては毎年6月初めに堰き止め、9月には水を落とした。堰開けの日には魚を獲るために多くの人が集まり、鵠沼の年中行事だった。

この右岸にはかつて「辻堂山」と呼ばれるクロマツの生えた小高い砂丘があった。子どもの遊び場であり、松葉掻き(燃料用の松葉を熊手で集める)の場所でもあった。戦時中まではノウサギも見られたそう。

このすぐ上流側に1969(昭和44)年3月に竣工した歩行者専用橋「長久保みどり橋」は、鵠沼地区の引地川では最も新しく架けられた橋である。

⑧ 藤沢市長久保公園 都市緑化植物園 辻堂太平台2-13-35

長久保公園都市緑化植物園は、自然とのふれ合いを回復し、都市における緑化推進の拠点として、災害時の広域避難場所として、また広く市民が利用できる施設として、1975(昭和50年)に開園した。

※ここで昼食をとった。ベンチや芝生もあり、トイレも完備されていて、昼食には最適なところ。

⑨ 清水橋 親水広場 辻堂元町6-7

清水橋は鵠沼村と辻堂村を結ぶ橋として架けられた意外に歴史の古い橋である。上流側右岸には親水広場があり、その南西端に稲荷の祠がある。これは昭和30年頃清水・菊田付近にキツネが出没し、皆で追いかけて捕らえ、鍋にして食べたところ病人が続出したため、祟りを恐れて建てたと伝えられている。鵠沼の最も新しい「伝説」である。

ここから上流は冬鳥が集まり、かくれたバードウォッチングの場になっている。また、引地川で最下流の「瀬」であり、ゴールデンウィークの頃、コイのノコミ(集団産卵行動)が観察できる。

※東海道線の下をくぐったところで右折して空乗寺に向かう予定だったが、先頭の方がズンズン直進されたので、遠回りとなり、見学順序も狂った。

⑩ きんくつざんこうじょうじ 金堀山空乗寺(浄土真宗高田派) 鵠沼神明3-3-21

戦国時代の末期(永禄元年と8年の2説あり)、了受の開山、大橋武部卿龍慶の開基により創建と伝えられるが、大橋龍慶はこの時点では生まれていない。江戸時代初期、鵠沼村・大庭村の一部500石を知行した旗本大橋長左衛門重保(引退後剃髪して龍慶)・重政(書道大橋流の祖)父子ゆかりの寺で、本堂は一昨年改築。重政夫妻の墓は鵠沼唯一の市指定史跡(会誌『鵠沼』24・37号参照)。

⑪ 首塚の碑 鵠沼神明3-3-17

明治12年2月設立の鵠沼地区現存最古の記念碑。金堀塚という小山(古墳?)を掘ったところ、人骨が出てきたことが記されている。題字は県令=野村靖(現在は一部剥落。判読不能。会誌『鵠沼』88号参照)

⑫ せいこうざんこうじょうざん まんぶくじ 清光山(鵠沼山)万福寺(浄土真宗) 鵠沼神明3-4-37

鎌倉時代の寛元3(1245)年、荒木源海が開基創建したと伝えられる鵠沼きつての古刹。荒木源海とは、俗名を安藤駿河守隆光という現在の埼玉県行田市出の坂東武者の一人。出家して親鸞上人しんらんしょうにんの直弟子となった。

現住職の荒木良正老師は鵠沼を語る会の会員。

境内には先年完成した太子堂、荒木蕉窓(荒木良正老師の祖父。鵠沼連という

俳諧集団を率いた)の句碑、阿部松翁・阿部石年父子(藤沢宿の儒家・書家)の墓、藤沢宿の旅籠大磯屋の墓地(猪飼蓬泉句碑つき墓碑・飯盛女の墓を含む)、内藤千代子(会誌『鵠沼』39・41・78号参照)の墓・森銑三夫妻(会誌『鵠沼』79・87号参照)の墓などが見られる。裏門を出たところには荒木老師の手になる日本電気硝子公害闘争の記念碑がある(会誌『鵠沼』90号参照)。

⑬ 鵠沼墓地 鵠沼神明3-4

日本精工建設用地にあった墓地を集めたもの。筆子塚(寺子屋の弟子たちが師匠の供養に建てた墓碑)・鵠沼きっての旧家=高松家墓所などを見る。

⑭ 上村宮崎誠一郎 鵠沼神明3-8-26

一昨年の例会で皇大神宮についてお話を伺った宮崎誠一さんは、氏子総代で日本電気硝子公害闘争のリーダーでもあった(会誌『鵠沼』90号参照)。この地点は明治初期鵠沼村最西端の家だったので、家屋番号1番がつけられた。

⑮ 上村神社・上野森稲荷・双体道祖神 鵠沼神明4-3-3

同じような社殿が仲良く並んでいる。上村神社(おしゃもじさま)と上野森稲荷である。境内入口には可愛い双体道祖神の祠がある。

⑯ 引地町内会館 鵠沼神明4-11-17

引地は江戸時代になって東海道が整備されてから街村として発達した集落で、平安～鎌倉期に大庭御厨として形成された皇大神宮氏子9集落とは性格が違う。町内会館の前には橋本稲荷の祠と神輿庫がある。この神輿は八坂神社(城南5丁目)の祭礼で、旧稲荷村・大庭村の2基の神輿とともに巡行する。

⑰ 鵠沼1番地跡 藤沢5-1-6

かつての引地橋は鵠沼・稲荷・大庭・羽鳥4か村の接点であり、各村の1番地はここから始まっていた。東橋詰では藤沢宿防御のため鍵の手が設けられていたが、ショートカット工事で北側は鵠沼地区ではなくなってしまった。

※ここで解散。多くの方は路線バスで藤沢駅に向かった。

今回のコースは、ふとした思いつきで設定したものだが、いろいろな面でかなり優れたものと自負している。市民散歩コースとしても推薦したい。

1. 見学箇所(記念碑が多すぎるが)が適当な間隔にあり、飽きがこない。
2. 見学目的が①引地川の改修。②鵠沼村の形成に集約できる。
3. 歩行専用道路が多く安全であり、極端な急坂などがほとんどない。
4. ちょうど中間点で昼食・トイレに適当な場所がある。
5. 若干長めだが、中間点で2分割できる(路線バス利用可)。

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成18年4月～平成18年9月)

総務部

運営委員会	3月29日(火)	9名出席
平成18年4月例会	4月11日(火)10時～12時	31名出席

議題1. 会誌「鵠沼92号」配付について―出席会員に渡し、他は配付表によって担当者に依頼した。(岡田)

2. 史跡めぐりについて―例年毎例の史跡めぐりについて、(1)引地川縁道を歩くコース(2)鵠沼南部石造物探索コースの2案が出たが、多数決で(1)案に決定した。コースの概略を担当の渡部会員が説明された。

3. その他―創立30周年記念事業報告と特別会計決算報告があり、全会一致で承認された。(竹内)これにより創立30周年記念事業実行委員会は任務を終え解散することになった。

お話―渡部会員より、鵠沼郷土資料展示室で展示中の「鵠沼村の時代」についてパワーポイントを使ってビジュアルな話があった。

運営委員会	4月25日(火)	13名出席
第20回総会・平成18年5月例会	5月9日(火)10時～12時	34名出席

第20回総会―有田会長の挨拶に続いて、新任の平綿センター長の挨拶があった。

その後議事に入り、次の「第20回総会議案」の審議を行い、原案通り全会一致ですべて承認された。

第一議案 平成17年度事業報告

第二議案 平成17年度会計報告及び会計監査報告

第三議案 平成18年度事業計画案

第四議案 平成18年度予算案

5月例会

議題1. 史跡めぐりについて―6月13日(火)例会終了後に行う。「鵠沼の西縁を歩く」ということで、引地川縁道を河口のニエアル記念碑からさかのぼって引地橋まで歩くコースを、説明案内担当の渡部会員から詳しく説明された。

2. その他 会誌「鵠沼93号」について、会員からの原稿を募集すると渡部会員から要請された。

運営委員会	5月30日(火)	12名出席
平成18年6月例会	6月13日(火)10時～12時	27名出席

議題1. 会誌「鵠沼93号」について—現在の原稿予定、「悠々荘は何処」、
「佐分利信芸名の由来」「長谷川巳之吉について」「鵠の字について」であ
ると渡部会員より発表された。

2. 興味ある研究テーマについて—一人の話を聞くばかりではなく、郷土の興味
ある歴史のテーマを決め、積極的に自分で調べて例会等で発表してもらい
たいと提案された。(有田)

3. 報告事項(1)サークル交歓会について—5月と6月に行われたサークル交
歓会について報告された。6月7日(水)の会議で公民館まつりが10月21
日(土)、22日(日)と発表され、行事当番が決められた。(浅野、中島)

(2)運営委員会について—新委員に佐藤弘会員、竹田会員を指名した。(有田)
史跡めぐり—例会終了後、渡部会員の説明、案内により、引地川河口のニエ
アル碑から西縁の緑道を、途中長久保公園で昼食休憩をとり、鵠沼
地番1番地の引地橋まで歩いた。参加者21名で3時頃散会した。

運営委員会	6月27日(火)	10名出席
平成18年7月例会	7月13日(火)10時～12時	26名出席

議題1. 公民館まつりの展示について—第30回公民館まつりは10月21日(土)、
22日(日)行われるが、鵠沼を語る会の展示会場は、一昨年に行った鵠沼
郷土資料展示室と階段の横のスペースに決った。テーマとしては、鵠沼の蝶
鵠沼の植物等の「鵠沼の生物」としたいと発表された。(内藤)

2. サーフビレッジ施設利用について—県から委託を受けた企業より、集会所
等が無料で利用できるのでは使って欲しいと挨拶があった。(有田)

3. 会誌「鵠沼93号」について—掲載予定のものは先月発表した他に、「富士山
先生について」「ハマカキランとクゲヌマラン」「鵠沼と蝶」「引地川史跡
めぐり」等でバラエティに富んだものとなる。(渡部)

4. 自主研究テーマについて—先月有田会長から提案があった自主研究テーマ
について、佐藤弘会員が「今までどんな鵠沼の歴史を調べているか知りた
い」鈴木会員より「料亭東家の研究をしたい」と提案があった。

お話—鵠沼郷土資料展示室で展示中の、「鵠沼海岸別荘地の開発と変遷」につ
いて出席会員全員で観覧し、展示担当者の内藤、渡部両会員より内容の
説明を受けた。

運営委員会

7月25日(火)

13名出席

平成18年8月例会

8月8日(火)10時～12時

27名出席

議題1. 公民館まつりについて—テーマを「鵠沼の生物」とする。竹内会員が鵠沼で収集した「蝶」の標本や、「クゲヌマラン」「オニヤンマ」「田字草」「藤沢メダカ」等を展示する予定。又、竹内会員と相談して9月中旬に展示準備のプロジェクトチームを立ち上げたい。(内藤)

2. 会誌「鵠沼」の分類について—佐藤弘会員より、会誌「鵠沼」1号～92号までの全作品を図書分類表に基づいてジャンル別に分類した結果を発表された。早速の自主研究1号の労作であった。記事で特に少ないと思われるものは、産業部門で、「農業」、「漁業」関連とのこと。

3. 塩沢コレクションについて—内藤会員宅に格納管理されている塩沢コレクションについて、元塩沢会長遺族から寄贈された経緯と、その内容、貴重な郷土資料として保存し広く地域の人たちに提供する場として、鵠沼を語る会が中心となって鵠沼郷土資料展示室を誕生させたいきさつの説明があった。(佐藤和、内藤)

お話—番場会員より「クゲヌマラン」との出会い、思いを話された。

伊藤会員より「クゲヌマラン」に良く似た「ハマカキラン」について話があった。

運営委員会

8月29日(火)

15名出席

平成18年9月例会

9月11日(火)10時～12時

23名出席

会場 鵠沼伏見稲荷神社参集所

議題1. 公民館まつりについて—展示内容の決定、展示方法の検討と実行等のため、プロジェクトチームを立ち上げることになった。まつりのテーマは「鵠沼の動植物」として、鵠沼の生き物の移り変わりを展示したい。

現物があれば展示する。なお、チームのメンバーは竹内、内藤、浅野、佐藤弘、高崎、高田、原、渡部が会員が指名された。(竹内、内藤)

2. 会誌「鵠沼93号」について—非常に多彩で面白い原稿が集まっている。

「長谷川巳之吉について」を除いて、合計63ページになる予定。

9月29日(金)9時より印刷、10時より製本作業を行うので会員の協力を要請した。(渡部)

お話—田村宮司、七字総代より「鵠沼伏見稲荷神社の歴史」について話があった。

終了後、田村宮司の案内で神社境内を見学した。(文責中島 明)

編集後記

- *昨年度は鵠沼を語る会創立30年記念事業として91・92号を記念号と銘打って発行したので、この1年間に一般の調査研究記録などがかなりたまっていました。あまりにも力作が多く、今号に掲載できないものができてしまいました。
- *ことに、鈴木会員の提案になる長谷川巳之吉氏についてが次号送りになってしまったことは残念ですが、この期間を利用してさらに研究を深められ、充実した報告がなされることを期待したいと思います。
- *冒頭には「富士山氏の人物像」を特集しました。昭和8年発行の書籍『現在の藤澤』の中には「珍姓名番付」の藤沢町の大関(最高位)にランクされている方です。今や、会員の中にも直接ご存知の方が少数になってきました。
- *氏の四女、山之内良子さんには、多くの資料を提供していただくとともに父君の思い出を寄稿していただくことを依頼し、ご快諾を得ました。深く感謝申し上げます。
- *続いての第2特集には生き物を採り上げました。当初の計画では、浅井康宏氏にハマカキランについてお書きいただく予定だったのですが諸般の事情で次号以降に回すことになり、特集としては中途半端なものになってしまいました。
- *新田貴代氏には、先般菊本別荘の三宜荘の額についてお書きいただいたところ、そのことを会のホームページで知った呉昌碩の研究家が、「昌碩は来日していないはずだが」と疑問を持たれて新潟県から訪問され、正確な事情が判明した次第をお書きいただきました。
- *「佐分利信」「悠々荘」「正ちゃん」など、『鵠沼』ならではの研究は、会員ならずとも、そのことに関心を持つ専門家にも刺激的な新知識を与えることになるでしょう。
- *鵠の字体については、多くの方が疑問に思われていたことが杉本氏の明快な解説により、一定の解答が得られることになりました。
- *後藤医院は現在「鵠沼の緑と景観を守る会」も関係して、現状維持を条件に売りに出ています。これを機になされた関東学院大の水沼淑子氏による調査結果を岡田会員にまとめていただきました。(渡部)

『鵠沼』 第93号
平成18年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>